昭和26年10月4日　第3種郵便物認可　昭和41年12月10日発行（毎月1回10日発行）

林業技術

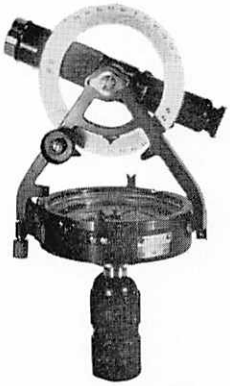
故 石谷理事長追悼特集

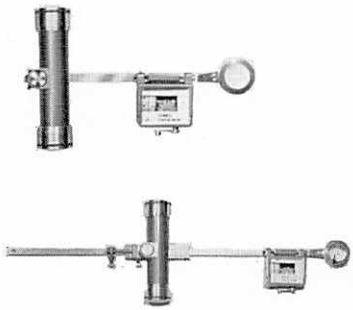
12. 1966 No. 297

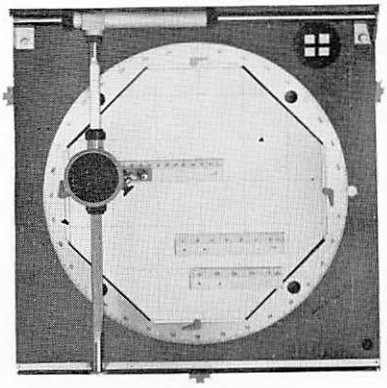
日本林業技術協会

林野庁・営林局
各県庁ご指定品

ウシカタの測量・測定機器







ポケットコンパスの最高峰
トラコン
〈牛方式5分読ポケットコンパス〉

正像10倍望遠鏡
5′読水平分度装備
磁石盤防水型

測定ミスをゼロにした
直進帰零プラニメーター **オーバックL**

ワンタッチ操作で完全帰零
長大図面の測定も一度に行える
ノンスリップローラーによる直進式

作図法をすっかり変えた
アングルディスク
〈牛方T式回転製図板〉

図面用紙回転
スケール平行移動式
不透明紙の使用もできる回転図板

牛方の主製品
ポケットコンパス 防水磁石盤 **ワイド輪R** ジュラルミン製・補助尺付
アルティレベル 測高器 **ポケットコンパス用金属三脚** 堅牢・超軽量
ペント 光学直角器 **測距単眼鏡** **牛方式成長錐** **水平距離計算表**

牛方商会 東京都大田区調布千鳥町４０
TEL (752)5329 (751)0242
★誌名ご記入の上、カタログお申しつけ下さい。

伸縮のない製図材料と地図・第２原図複製

基本図々化材料

●ミクロトレースP・PW（白マット）・・・・・・航空写真図化用（鉛筆専用）ポリエステルトレーシングフィルム

●A・Kケント紙・・・・・・・・・・・・・・・・・航空写真図化用アルミ箔サンドケント紙

●ダイヤマット・・・・・・・・・・・・・・・・・無伸縮ポリエステルトレーシングフィルム

基本図第２原図

●ミクロコピー・最も多く使用されているポリエステルフィルムの第２原図(セピア・ブルー)

●ミクロポジ・・・・・・・・・・ブルー・セピア黒色画像のポリエステルフィルム第２原図

基本図編纂

●$\frac{1}{5,000}$基本図をトレースを行なわず写真法にて接合し林班ごとに編纂。又は$\frac{1}{10,000}$・$\frac{1}{20,000}$に縮尺・図割を替え編纂

○その他図面複製及び製図材料に関することは何なりとご相談下さい。

株式会社 **きもと商会**

本社・東京都新宿区新宿２―13（不二川ビル）
TEL（354）０３６１（代） 工場◆東京・埼玉
営業所・大阪市南区東平野町２－８（協和ビル内）
TEL（763）０８９１～2

かんたんに伐採できます！

新製品《マイクロビット》は、伐採量をより多くするために、特に品質やデザインを研究してつくりあげたかってない高性能ソーチェーンです。切れ味は抜群、手入れも簡単。疲れをほとんど知らずにグングン仕事がはかどります。《マイクロビット》のチーズを切るようなすばらしい切れ味を、ぜひお確かめください。

＊お求めはお近くの販売店でどうぞ。

新発売！

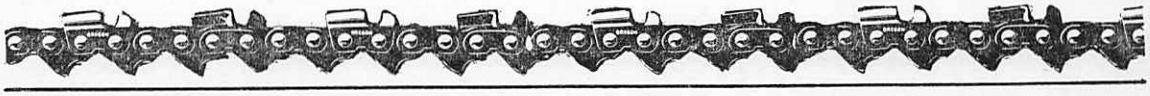
OREGON®

オレゴン ソーチェーン

マイクロビット

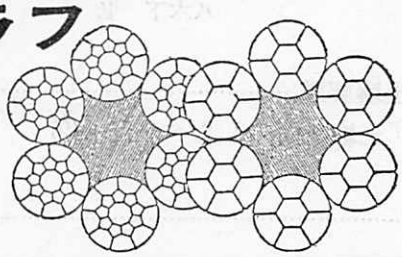
OMARK オマーク インターナショナル会社

本社／米国オレゴン州　工場・支店・取扱店／世界各国



S.R.A.F ロープ

スラフ



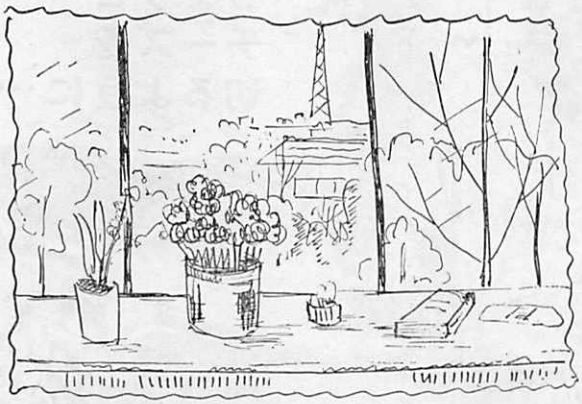
林業用
高性能
ワイヤロープ
新製品
スラフ

昭和製綱株式會社

本社工場	大阪府和泉市府中町一〇六〇 電話　和泉　二八〇一二番
大阪営業所	大阪市南区鰻谷西之町二五　(川西ビル) 電話　(26)　五八七一・七一一七番
東京営業所	東京都千代田区丸ノ内三ノ一〇　富士製鉄ビル内四階 電話　(212)　三九二一一四
札幌出張所	札幌市南八条西三丁目　電話　2局　二六六九番

林業技術

12. 1966 No. 297



石谷理事長追悼号

目　次

巻頭言……追悼号によせて……徳本孝彦…1

座談会……石谷さんを偲ぶ……2

特別寄稿……石谷さんをしのんで……10
水野金一郎　藤井敏也　伊藤陳重
小林堅蔵　森田　進　相沢平悟
小畠俊吉　高田秀男　柴田　栄
山崎　斉　片山佐又　大崎六郎
重元　厳　光本政光　公平秀蔵
八木下　弘

連続講座……森林土壌解説……久保哲茂…32
「土壌断面のしらべかた」(2)

本の紹介……35

林野の鳥シリーズ……山にすむスズメ……宇田川竜男…36

とびっくす，林業用語集……38

ぎじゅつ情報，こだま……39

会務報告，編集室から，その他……40

1966年度総目次・第14回林業写真コンクール募集

表紙写真
「北国の浜辺」
佳作
第12回
林業写真コンクール
杉山良一　酒田市

追悼号によせて

専務理事　徳　本　孝　彦

光陰矢の如しという。石谷さんが突然，まったくあっというまに，私たちの手のとどかないところへ行かれてから，早くも90日を過ぎようとする。そして，日増しに，石谷さんの教訓の数々が生々しく去来する。おそらくこんごも，嬉しいにつけ，苦しいにつけ，協会の業務とともに，そして，日本の林業の繁栄のかげに，石谷さんの尊い遺志が，必ずや力強い形で脈々と生き永らえるであろうことを想像している。

あの瞬間，どうしても信じられない気持ちで一杯であった。また石谷さんを知る多くの人々も，まったく信じられなかったにちがいない。巨木倒るの直撃感をうけたものの，どうしても信じられなかった。しかし現実を疑うこともできなかった。ともすれば，何を考え，何をしていいのかわからなかった。その瞬間，天の一角から，「お前たちは何をぼんやりしているのだ。とまどうことはない。おれが常に教えていたことをやればよい。皆で心と力を合わせて，しっかりやれ。」と，静かながら力強い声が，叫びつづけてきた。十年前だったか，森林法改正のための試案を練っている頃，石谷さんは，「原案を早く作らないと，間もなく梅が咲くぞ。ぼやぼやすると，そのうちに桜が咲いてしまうぞ。どうしてもお前達にできないのなら，おれが作ってやる。」といわれていたあの頃のことを思い出した。ただちがうことは，こんどは，おれがやってやるという，そのおれがいないのである。当時，ちょうどお相撲さんのふんどしかつぎが横綱の胸をかりて，ぶっつかり，ぶっつかり技を磨き心と力を養っていく姿にたとえながら，忙しいそして苦しい中にも，希望と楽しみを持って努力し合ったものである。

石谷さんのあの偉大さを教育された数々の先輩諸先生方に対して，改めて敬意を表するとともに，石谷さんに薫陶をうけた数えきれない多くの人々，とくにそれらの中の確実なメンバーとしての1万5千に近い協会員が，石谷さんの遺産——それは林業技術の改善と林業の繁栄へのいいしれぬ情熱であるが——を固く守り続けることが，一つの大きな，石谷さんへのご恩返しであると思う。

石谷さんを知る人は，誰でも，「あの石谷さん」というそれぞれの形で忘れえないものを持っているであろう。しかし，人の偉さは，いろんな角度から見て，そして日が経つにつれて，真のよさが次第に強く印象づけられるものであろう。各人各様に，接した角度はまちまちであったと思われる。会員のみならず，広く読者の方々にも，林業に対する情熱のあり方，人間性の勉強の仕方，信念の表現の方法，などについて，その人なりに，ヒントが得られるならば，この追悼号の意義が生きてくる。

石谷さんを失ったことは，まことに大きな損失であり，協会にとってもこれ以上の禍はないはずである。その事実を，悲しみの中にかみしめながら，協会のこんごの仕合わせを求めて，新しい発展を通して，日本の林業界の繁栄のためにつくすことを，皆で誓いたい。

座　談　会

石谷さんを偲ぶ

出席者（順不同・敬称略）

若林正武（林野庁長官）
栗田憲二（静岡県林務部長）
北村　暢（参議院議員）
佐藤大七郎（東京大学教授）
小滝武夫（日林協育林技術研究会委員長）
上野金太郎（全国木材組合連合会副会長）
白井四方（十条製紙株式会社顧問）

本会から　松川恭佐（司会）徳本孝彦　成松俊男

とき　10月29日　ところ　全国町村会館

松川　石谷さんがなくなりまして，ちょうど40日になります。早いものだと思います。たいせつな時期にまことに惜しい人をなくしまして，残念のいたりでございます。

本月24日，郷里の鳥取県智頭町で納骨式がございまして，私，会員ならびに役員のかわりに参会いたしてまいりました。たいへんな盛儀で，知事，地元の国会議員，県会議員，地方有志，知已，同窓生など，おそらく800人から1,000人ぐらい集まられたんじゃないかと思います。鳥取県のホープとしていかに惜しまれたかということが，わかったような気がいたします。

本日は，まことにお忙しいところをどうもありがとうございます。石谷さんについて世の中のあまりご存じないようなこともお話しいただければ，たいへんしあわせと思うのでございます。

惜しい人を失った

若林　頑健そのものだった石谷さんが，まさかこんなことになろうとは思いもよりませんでした。ほんとうに惜しい先輩を失ったものと心から残念に思います。

これは林野庁にとってはもちろんのこと，日本の林業界にとってまことに大きな損失であると申し上げても決して言い過ぎではないと思います。

石谷さんが遺された日本の林業への功績は今さらここで申し上げるまでもないほどなんですが，昭和6年に学窓を出られて，秋田営林局に奉職されて以来今日までそれこそ一生のすべてを林業に捧げられたと言えるでしょうね。在職中は経済安定本部林産課長，林野庁計画課長，業務部長，長官といった要職を歴任されたわけですが，当時の困難な諸状勢を克服して，あの馬力にものを言わせて，ことごとく解決されたことは，まことに鮮やかという他なく，今でもその折々のことが記憶に残っております。

参議院議員となられてのめざましい活躍はどなたもご存じのことですが，最近は日本林業技術協会理事長，全国山林種苗協同組合連合会会長，全国木炭協会長，全国公団造林協議会連合会会長として林業界振興のために，文字通り寝食を忘れて精励されておられましたね。われわれとしてとくに忘れられないことの一つに日林協にも深い関係のある森林航空写真事業のことですが，戦後の混冥期にあって，荒廃した国土復興意欲が膨拝として興りつつあった昭和27年森林法に基づく森林計画の樹立事業が発足した時，計画課長として計画編成に必要な基本図作製に空中写真測量を取り入れることを決断され，その後わが国の林業部門に大きく空中写真がとり入れられる動機を作られました。つまりわが国で最初に空中写真を事業化したのは林野庁であり，その基を作ったのは石谷先生です。

先生は仕事には誠にきびしく近よりがたいような感じも時にはいたしましたが，神経は誠にこまやかで，よく人の面倒を見られる一面もありました。また，私どもと旅行された時など，三杯汁をうまそうにすすったり，時には，非常にまれであったかも知れませんが，小声で安来節を口ずさむようなこともあるなど，私どもと同じ人間の一面をも持っておられたことが，一入おなつかしく思い出されてなりません。（紙上参加）

松川　若林長官はどうしてもご都合がつかず，ただいまご披露いたしましたようなことで紙上参加をしていただくことになりましたのでご諒承をお願いいたします。小滝さんは学校ご卒業以来ずっとごじっこんの間柄のようですが，石谷さんの若いころのことからお話し願いたいと思います。

人格形成時代

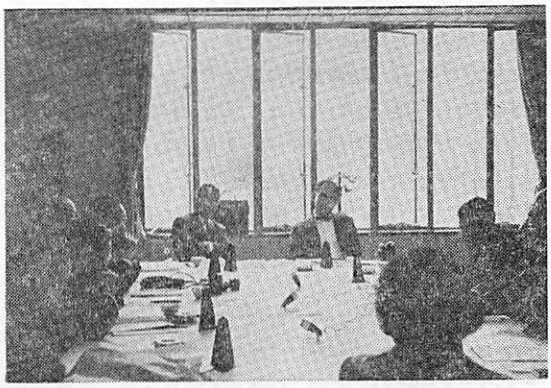
小滝　私と彼とは，昭和6年，それぞれ学校を出まして，秋田営林局に勤務した。そのとき以来の長い経過を考えて申し上げてみます。彼の経てきた道を分けてみますと，秋田における人間形成時代，彼がいままでいろいろいわれているようになったということにおける人間形成の時代が，私はあったと思っております。それから山

林局に引っぱってこられたんですが，まもなく応召となり，復員した。それから計画課長時代，それは私にいわせますと，林野におけるいわゆる青年将校時代ともいうべきときだったと思います。その後，部長となり，長官となった。これは彼の経歴から見て，仕事のうえにおいてほんとうに花を咲かせ，実を結ばせた時代だろうと思うんです。

秋田における人間形成時代の彼の一面を，語ってみたいと思うんですが，柴田さんを班長にして，私，彼，死んだ石川利治というのが，秋田のスギの施業案の再検討ということをやって，いっしょに山を歩いたわけです。

彼は仕事しか趣味がなかったと思うんですが，あれでも尺八をよくやっていまして，私が彼から都山流なんていう尺八の流儀があることを教わったのは，そのときなんです。よく山で，つれづれなるままに尺八を吹いていることもあったんです。

それから，彼をああいう人に鍛え上げたのは当時の計画課長，岩崎準次郎という方の薫陶です。



これは柴田さんも私どももみな，今日の言葉でいえばしごかれたわけです。なかんづく石谷君はあの明敏な頭脳ですから，やはり岩崎さんも期待するところあったと思いますが，とくに目をかけて鍛えられました。

岩崎さんは「欧州の林業より」という原稿を，当時の林曹会報に連載しておられたんですが，その原稿書きのお相手は，全部石谷君です。だいたい岩崎さんという方は，朝10時ごろ出てこられて，昼ご飯は午後４時ごろ，晩ご飯と称するのがだいたい10時ごろ，やはり役所で食べられる。４時ごろ，あるいは５時ごろから，「欧州の林業より」が始まるんですが，もう土曜も日曜もないんですよ。そういうことで，その鍛え方たるや，たいへんなことだったんです。

それからまた，スギの択伐林に関する論文をまとめるというのも，ほとんど石谷君がやった。ところが，彼がまとめたものを岩崎さんのところへ持っていくと，それが真っ赤になって返ってくる。

そいつをまた清書して持っていく。また直す。岩崎さんという方は，理論どおりやるということで有名だった。

そうでありながらまた，ものごとを現実的に処理されるということは，これまたみごとでございました。

けっして節をはずれた現実的な解決をするんじゃないんですが，一面，現実的に処理された。彼が，いつでも理論をふまえながら，現実的な解決をしていくという手法を教わったのも，秋田時代における岩崎さんのおかげじゃないかと，私は見ておるわけです。

とにかく彼の仕事のしぶりというものは，岩崎さんの影響が非常に大きい。

これはひとり石谷君ばかりじゃないんで，柴田さんでも私でもそうですが，なかんづく石谷君は，岩崎さんが目をかけて薫陶したと見てよろしいと思います。

とにかく夏も冬もなく，また土曜，日曜，祭日まったくないというような訓練を石谷君はそこで受けた。これは昭和６年から13年頃のことでした。

松川　北村先生は，石谷さんが林野庁の計画課長のころ，その課員でおられたわけですが，その当時のことから思い出話を……。

面倒みのよかった実力者

北村　私が昭和24年，林政統一後に，旭川営林局から林野庁に転勤した際，ちょうど石谷さんは計画課長でございました。私は異端児で，労働組合運動なんかやっておったのですが，内々にあまり労働組合運動なんかやらないんだという約束で（笑声）林野庁へ転勤したらしいんです。

ところが来てみると，どうもそういうわけにもいきませんで，当時は仕事半分，組合半分という状況でした。

ちょうど森林法改正の時期でもございましたし，非常に忙しいので，課長から，つとめて仕事をやるようにといわれておったんですが，どうも課長の意思に沿えないようなことで，まことに申しわけないと思っております。

石谷さんが業務部長のころには，私，組合の委員長をやっておりましたので，そういう意味で，またたいへん面倒みていただいた。私，ひらの職員でありましたけれども，部長，長官という人に会う機会が多かったわけなんです。その上，私も官舎が浦和でございまして，１町ばかりしか離れていないところにおりましたので，正月

なんか，ちょいちょい押しかけていって，いろいろご意見を拝聴したもんです。

正月ですから酒も飲むんですが，べつに待遇なんていうことに気をつかわないで，ありあわせのものにコップ酒で，ひざをまじえてざっくばらんに話す。

そういう環境にありましたので，石谷さんの非常な人間味といいますか，情のあふれた，いうにいわれない指導を，直接に得たわけでございます。

もう一つ，非常に大きく印象に残っているのは，私は28年の参議院選挙に出まして，1回目は無謀な選挙をやったものですから，落選したわけです。落選ということがわかった翌日，落選すると早速，食べていくのに問題があるんで，石谷さんを訪れて，ぜひ復職させてもらいたいと，端的に申し入れをした。そしたら「うーん」といっておりましたけれども，すぐ「よし，引受けた」といって，ごく簡単に引受けてくれました。

それから6カ月ぐらいほとぼりをさまして，復職したわけです。

部下の面倒は，非常によくみた方です。

これは私ばかりじゃない。石谷さんに面倒みていただいた人は，非常に多いと思うんですけれども，私はとくにお世話になったわけです。

小滝　戦後21年に復員して，計画課長になるまでの間は，戦後の混乱時代で，いろいろなことをやっておった。このときは，技術者運動も，あるいは林業技術に対することも，なにもかもごちゃごちゃとやっておったといっていいと思うんです。

彼が計画課長当時，私は北海道の林務部長をしておりまして，少なくとも北海道のこと，ないしはそれに関連した仕事というのは，ほとんど石谷君と私が相談したといっていいと，私は思っております。まず，いわゆる青年将校の実力時代というのが，この時代かと思うんです。さきほど，北村さんの復職のことを引受けたというお話がありましたが，いかにも彼らしいことだと私は思っております。

いま考えるとかようなことは，一計画課長ぐらいが引受けたというようなことは，いえるものじゃないんですね。やはりまだまだ混乱が続いて，あるいは実力時代だったのかもしれませんが，とにかく実質的に林野のそういったことを振り回していたのは，彼だといっていいと私は思っております。

松川　上野先生，業界方面と石谷さんというお話がございましたら，どうぞ……。

上野　私が石谷先生にはじめてお目にかかりましたのは，昭和21年，終戦の翌年です。

おそらく鳥取署長に赴任される前だと思います。戦災都市復興のために，資材を輸送するということで，これは主として石谷さんがお考えになったと思うんですけれども，国有林の販売による木材列車を運行する計画があったんです。製材工場の原木がはいってこないので，これをなんとかしなければならないというお考えのもとに，秋田その他から木材列車を運行するという計画をされた。これは業界として，非常に助かるわけですが結局業界の協調がとれなかったために，石谷さんに非常にご迷惑をかけ，結果において，木材列車の輸送は1回だけでとりやめになったことがございます。

風倒木とソ連材

上野　それから昭和29年，15号台風による風害木が発生しまして8,000万石に達するということで，これが木材業界に非常に大きなショックを与えました。国有林のこの処理の方法いかんによっては，日本の木材界が大きく動揺することが懸念されました。たまたま昭和29年は，戦後はじめてソ連材がサンプル輸入で清水港にはいった時で，日本において針葉樹材が非常に不足しておりましたので，損害を覚悟してそれを入れた。その年に北海道の風害が発生したものですから，この処理につきましては，実はわれわれ業界におきましても，いろいろと林野に対して建言もいたしましたし，林業団体におきましても，対策協議会などをつくりまして，林野と協議をしたわけでございますが，結局，石谷さんが業務部長になられましてから，輸送，販売に非常に適切な方法をとられ，いささかも市場を混乱に陥れることなく，2年半かかって無事終了したということは，この問題については，国有林の総力をあげておつくしになったこととは思いますが，その本部長として処理にあたられました石谷さんのご手腕に対しては，いまでも忘れえない事績じゃないかと考えております。

私がきょうここへ出席いたしますについて，石谷先生のことでなにか申し上げることをと思いまして，2・3の人に聞きましたら，実によく業界の面倒をみていただいた，くれぐれもそのことを申し上げよということでございましたので，申し上げておきます。

兵長参謀

松川　ここで話を昔に戻して兵隊時代のことを白井さんにお願いしましょうか，有名な逸話があるようですが——。

白井　私，先生とごじっこんに願ったのは，昭和19年シンガポールにおいてであります。

私は当時，王子製紙におりましたが，暁部隊から，船の修繕用のドックをつくる木材を調達して欲しいということでお前，行ってやれということになりました。いきましたときには，すでに大手の商社が，林地のいいところで仕事をしておりまして，私ども，どこで伐ったらいいのか，どういうものをやったらいいのか，さっぱりわからんわけです。

それでとりあえず軍政監部にまいりまして，林政担当者に会ったわけですけれども，そのときの司政官は佐々木五郎さんでありました。その下に石谷さんがおられたわけです。

だんだん話しているうちに，「それじゃ商社のほうと相談してみたらどうですか」というようなことで紹介をいただきました。それで，パハン州のチギーという湖畔に，英国時代の保護林がある。そのうちの1カ所を，やったらいいだろうということで，そこへいって仕事を始めたんです。

いずれにしても，ようやく仕事にかかったのが19年の3月ごろで，9月にはじめて300石ぐらいだったと思いますが，海上筏をつくって，シンガポールまで240カイリぐらいを持っていったんです。第2回目は，ひと月ほどたって500石近い筏を持っていきました。

製材工場へ筏をつけたから，ぜひ見にいこうということで，先生といっしょにまいりましたが，そのときに，「いま資材の不足なときに，よくこれだけ持ってきてくれて感謝にたえない」ということをいわれました。そういうようなことがあって，休みの日なんかには私がご案内するというようなことで，おつきあい願っておったわけです。

そのあと，もう終戦間近の20年6月になりますと，いよいよシンガポールの防衛資材というものがなくなってきた。

「白井さん，どうしてもこれはひとつ，あなたのほうで近いところをやってくれないか」と言うことで，石谷さんといっしょに，ジョホール州とパハン州境のロンビンにでかけることになったんです。

その頃は，マレー地区全体に共産匪が蜂起してジョホールの山を越えると非常に危険でしたから，石谷さんは知り合いの店に入って，兵隊の服を脱いでしまいまして，「あなたのほうが年上だから，あなた課長になれ，おれは随行でいくような形にしよう」と，2人だけで自動車を走らせ無事にロンビンにつきました。その時，「とにかくこうなれば，日本はもうだめだな」と当時としては口に出しにくいことを言いました。

そのときに私は，非常にはっきりしたことをいわれる方だ，また鋭い批判をされる人だなということを感じたわけです。

それから，兵隊でもって，最高の参謀会議に出た。これは日本広しといえども，おれ1人だろうということをいわれたんです。シンガポールには，各部隊が集まっていて，会議には各部隊から参謀が出る。そこへ佐々木さんが司政官としていかれるんなら，あたりまえかもしれませんが，兵隊である石谷さんがいくということは，ちょっと不思議なんですよ。しかし，たしかに出ました。はじめの間は暑いところだもんですから，部屋へはいってくると，みんなすぐ上着を脱いで，うしろへ掛けちまう。そうすると，兵隊だか大佐だかだれもわからない。（笑声）原木をいかに調達するかということになりますと，石谷さんは明徹な頭脳でもって一席やるわけです。

ところが，会議を何回か重ねている間に，なんだ，石谷というのは参謀じゃなくて，兵隊じゃないか，という話が伝わったわけです。（笑声）それでそのことが本人の耳にはいった。そうしますと，「ようし，それじゃおれは兵隊のままでもって会議に出てやる」ということで，次からは，ほかの人が全部，上着を脱いでいるのに石谷さんは兵長の上着を着たまま座っている。（笑声）そうしていたらある参謀から，「なんだ，兵隊のくせにこんなところへ出てきて……」という発言があった。そこで石谷さんが，「兵隊が出てきて何が悪いか。それじゃ林業のことを知っているものはだれがおるんだ」……。普通の人ならこんなところは，おれは兵隊だからといって遠慮すると思いますけれども，おれが出なきゃだめだというので，そこへずっと出て論議をかわされた。そのうちにだんだん評判になって，「軍政監部に石谷兵長参謀あり」（笑声）という言葉が，われわれの耳に伝わってきたわけです。

石谷さんは，おれがいってやろうという信念，また勇気が非常にあったんだと思います。

成松　私も南方で，兵長参謀時代の石谷さんをよく存じあげているわけです。私，当時マライ軍政監部のほうにおりまして，ちょいちょい昭南へいきましたから，お会いしております。

たまたま南方木材会がございましてその席で，例によって先生，演説を始めるわけなんですよ。そうしますと，海軍の参謀が「だまれっ！」こういったんです。（笑声）「一兵卒がこういう席へ出るべき筋合いのものじゃない。出ていけ」，先生「ハッ」とかいいまして，5分か10分静かにしていましたが，また始めるんですよ。（笑声）そうするとまた「だまれっ，出ていけ」とどなられるんです。それでもやっぱり最後までがんばって，自分

の所信を堂々と述べられた。

あの当時，軍においでの方はみなさんご承知のとおりに，軍政監部の要員というのは，参謀に対しては，直接ひとことも文句がいえるような時代じゃないんです。それで私たちも，軍政監部の司政官として出席しておりましても，参謀連中を説得するような，しかもけんか腰で説得するようなものの言い方は，する勇気がなかった。それをやってのけたということは，かなりの人間だ…。マライにおりました林業人はみんな，そういうふうにあの人を高く評価しておったわけなんです。

花咲ける時代

松川　せんだんは双葉より芳ばしといいますが，軍隊時代にも大いに林業的な活躍をなされ，その後小滝さんのおっしゃった花咲ける時代が到来したわけですけれども，長官，議員時代のことに話を移しましょうか，北村先生一つ……。

北村　歴代長官みんなりっぱな方ですけれども，そのなかでとくに，石谷さんは統率力においては非常にすぐれておったと思うんです。その統率力の問題で，非常に卑近な小さなことですけれども，当時，全購連事件というのがあって，農林省でも綱紀粛正でだいぶ激しかったんですがね。林野庁に起こった問題ではなかったんですけれども，そのときに林野庁は，営林署長は署長室におってはいけない，職員の監督は直接やれというので，署長は署長室から職員のいるところへ出されちゃったんです。場所のないところは，署長室との境のところを窓にして見えるようにするとか，徹底してやられた。

もう一つの問題は，営林署に乗用車があったんですな。その乗用車はいっさいいかんというわけです。全部ジープにしちゃえ……。(笑声)ジープか客貨車でなけりゃならない。それでいまだに営林署じゃ，乗用車を買うことができないんですね。それじゃ各局でもそういうことをやったかというと，やらないんです。林野庁だけ，石谷さんは徹底してやった。

それから，国会に出ての答弁ですが，ちょっとした質問をしても，その答弁が長くて長くて，(笑声) 非常にうんちくを傾けられる。たいてい質問するのがいやになっちゃうんですよ。そういう意味じゃ石谷さんはしゃべりまくって，相手が質問するのがいやになるように，戦意を喪失させちゃうという特殊技術がありましたね。(笑声) どうもしゃべりまくられちゃって，くいつく余裕がない。そういう独得な長官でした。

松川　上野さん，石谷さんの部長，長官時代に，木材界に尽くされたことについてお話しいただけませんか。

上野　私，全国北洋材の理事長をしておりますが，ソ連材のコンシューマーの国内最終機構をつくってもらったのは，石谷さんなんです。これは石谷さんが業務部長のとき，中川林産課長がおつくりになったと思うんですが，この組合の運営につきまして，いろいろとご指導いただいた。このことに関しては長官時代，ソ連の代表なんかとお会いになりますと，日本の立場をお話しになったり，林産課長に指示されて，日本の業界の事情を説明させるというようなことは，非常に親切な方法であったと，いまでも感心しているわけです。

小滝　彼が長官になってからの仕事では，どれがいちばん大きいかということの評価は，たくさんの仕事のなかからできませんが，私の感じとしては，国有林の林力増強計画，それから販売だったか経営だかの合理化ということをやりはじめたのは，彼の時代だったと思っております。

合理化の問題はいまでもたえずやられておりますが，そのトップを切ったといいますか，とにかく時代の要請をつかんで，国有林経営を一つの軌道にのせようとしたことは，ほかの人もやったかもしれませんが，彼らしい仕事だ。こういうふうに，私は高く評価するわけです。

北村　議員になってからは，さきほどお話がありましたが，たしかに業界のお世話は，非常によくやったんじゃないかと私は思っているんです。

また後輩の長官をいろいろ援けた。とくに林業基本法が制定されるときは，衆議院はなんとか修正して通ってきたんですが，参議院は質疑の余裕がない。普通からいえば継続審議か廃案が常識であったんです。私も社会党の党内をまとめるのにだいぶ苦労しましたけれども，その際に石谷さんは非常に心配されて，何回か私のところへきては，「おい，ほんとうに大丈夫か」とたしかめられましてね，最後の討論まで努力されました。

そしてまた非常に強く感じたのは，歴代長官が参議院に出られるわけですけれども，とくに林業関係については，ほかの方々も大いにご活躍になったことはもちろんですが，石谷さんの場合，ほんとうに林業人の代表らしい行動があったと私は感じております。

技術者としての一面

松川　秋田時代にも科学的，合理的な見方，考え方をたたきこまれたという石谷さんの林業技術に対する理解のしかた，国有林野事業を通しての技術的な業績というとどういうことになりますか。

小滝　林力増強計画は，技術的な基礎がかなり欠けておった。もちろん長官の大局的な考え方としてはそれで

よいが，これを実施に移す場合に，そういう点に若干問題があるということを，私はよく彼にいっておったんですが，彼もけっしてそれを知らんわけじゃなかった。というのは，それを裏うちするものとして，育種事業を考えた。今日における育種事業の隆盛の基礎はこのときできたわけで，それは彼が，林力増強計画における技術的な弱点を，十分知っていたと判断していいと思います。

これは単なる思いつきじゃなしに，岩崎流の科学的な，ないし技術的な基礎をおこうとした，彼の考えのあらわれだというふうに，私は思うんです。

それからまた林業技術ないしは，われわれ技術者というものに対する彼の考え方，これは杉の木会あるいは林政会時代から，たえず頭に入れて仕事をしてきたわけですが，今日の日林協に対する彼のひと方ならない援助というか，同意というか，彼が日林協の育成に非常に力を入れたというのは，やっぱり彼のそういった考えのあらわれだというふうに考えるわけですよ。

松川　まったく小滝さんのお話のように，石谷さんは，「政治家になる前に自分は一技術者であった。それを忘れない」と，よくいっておられました。栗田さんもそういう面で感じられたことを何かお話し願えませんでしょうか。

栗田　計画課長時代だったと思いますが，静岡県が伊豆の湯ケ島に，ワサビ研究所をつくり，私はちょうどそこでワサビの栽培試験をしておりました。そのときにたまたまＳＰの試験を受けにいきましたら，先生が口頭試問の試験官でして，私がだいぶワサビのＰＲをしましたところ，非常に興味をもたれて，「一度かならず君のやっているところを見せてもらいにいく」と約束していただきました。まさか先生がおいでになるとは思わなかったんですが，それからしばらくしましたら，わざわざ伊豆の山の中まで１人でおはいりになって，ワサビの栽培状況，私がやっている試験状況など，まる１日，非常にこまかく見ていただきました。そのとき，いろいろお話をうかがいましたが，「地方でこうした特殊な産物を研究しているところはどこにもない。君は一生の仕事として，こういうものにひとつ，突っこんでみよ」というようなことをいわれまして，私，先生のこまかい，思いやりのある，直接自分で解決されていくというような面に，ほんとうに打たれたわけでございます。

松川　佐藤先生，石谷さんとは常務理事会，その他学会方面のこと，あるいは仕事の面で，ご関係があったと思うんですけれども，なにか……。

佐藤　私，石谷さんを存じあげたのは，このなかではいちばん遅いんじゃないかと思います。

石谷さんとの出会いということになりますと，妙なところでお会いしているんです。といいますのは，私は学生の結婚式によばれていきまして，披露宴の控室に待っておりました。お嫁さんのほうは隣の控室に待っていて，めでたく式がすみますと，間のカーテンをとっちゃうわけですね。そしたらむこうに，なんだか見たようなおじさんがいるわけです。私の教えた学生の側にいればわかるわけですが，その反対側にいるわけですからわからないで，どうも見たようなおじさんだと思っておりましたら，そのうち紹介されてみると，かの有名なる石谷さんだということになったわけなんです。（笑声）それは10年ぐらい前ですから，石谷さんは，〝かの有名なる〟石谷さんだったんです。最初に私が紹介されてごあいさつを申し上げたら，いわれることに驚いたのは，ちょうど林野庁に育種班ができるころで，初代の班長になったのは，この間まで長野営林局長をしておられた伊藤清三さんですが，伊藤さんがなられる準備段階で，新しい仕事ですから，いろいろな人のところを回っておられたようで，私のところにもきて，泡をとばして談じていかれたことが，しばしばあったんです。そういうことを石谷さんはちゃんと知っておられて，「伊藤君がたいへんお世話になっています」と，はじめて会っておっしやった。これは恐れいった，うわさにたがわずたいした人だと思って，感心したんです。これが最初です。

その後，お互いべつに用のない間柄ですから，お目にかからずにいたんですが，たしか北海道の旭川へ，例の小滝さんあたりに心配していただいた仕事で調査にいったときに，ホテルのロビーで，夜ばったり会ったら，僕のことをよく覚えていて――たぶん調子合わせているんだろうと思って，いろいろテストしてみたんですが，（笑声）ちゃんとまちがいなく覚えておられるんで，感心したんです。それが２度目ですが，そういったように，昔の偶発的なことを覚えているのは，石谷さんが，人に，深い印象を与えるものをものをもっておられたからだと思います。そうしているうちに，日林協の常務理事というのをやらされました。

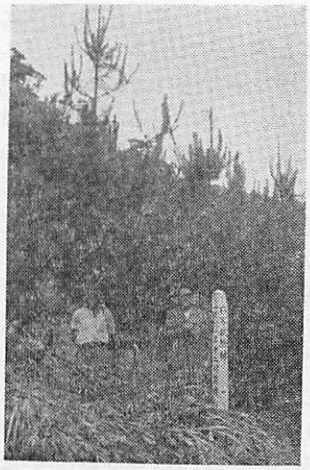
お互いに忙しいので，かけちがいながらも，３月に一度ぐらいは，お目にかかってきたわけです。いまでも思い出すのは，とにかく日林協は，事務的にはちゃんとした機関ですから，常務理事会といったって，たいした議論をして決めなきゃならないということは，そうむやみやたらにあるわけじゃないんですよ。話していて，議題に対する考え方がちょっと妙な方向へいったりすると，石谷さんは例の三白眼をギョロリとむいて，（笑声）「それはこういうことじゃないか」というような調子でやら

れる。目を半眼に閉じているから，ああ，石谷さん眠っているなと思うと，ギョロリと目をむかれるんで，われわれ警戒していたものです。(笑声)

一見大物ふうにかかわらず，いろいろこまかいことに気がついておられるので，感心しましたね。小滝さんが中心になっておられる日林協の育林技術研究会の仕事も，積極的に応援していただきまして，それも広い見解で，いわゆる日林協の中の機関でありながら，林学関係だけでなく，理学関係の人までが，いっしょにはいって仕事をやっていくというような考え方についても，賛成してよくやっていただいた。

そういう点は，いろいろと非常によく考えてやっておられたと思っております。

全部で30回位の出会いを通じて，石谷さんというひとは頭のきれる方で，なにかあるとパッと決断される。その決断というのは，鋭い頭でちゃんと計算しておられたという感じを，私はもっております。



石谷試験林

松川　ありがとうございました。白井さん，西表島開発に関係して，なにか石谷さんのお話を……。

白井　沖縄のいちばん南のほうに，西表島というのがあります。

これは沖縄本島に次く大きさで，全体が3万2,000町歩ですが，そのうち国有林が，2万4,000町歩ぐらいあるんです。これは旧熊本営林局の所管であったわけですが，かつて，伐採権を持っていた八重山開発株式会社をいろいろな事情から，先生にごあっせんいただいて，十条製紙が傘下に納め，石谷先生には八重山開発の顧問になっていただいて，港湾施設，道路，橋梁の建設などに，非常な，お骨折りをいただきましたが，自分も一べんいってみなきゃいかんというので，私どもが仕事を始めました翌年，忙しい生活のなかで，現地を視察してもらったんです。それが昭和36年はじめです。

その時，「この島にいいかどうかわからんけれども，帰ったらマツの種を送るから」ということで，帰られてから，封筒に少しスラッシュマツの種を入れて現地のほうに送ってもらった。

面積的にはほんのわずかですけれども，それが現在，非常にいい成長をしているんです。

これがその写真です。私のほうは，そこで仕事を始めましてからいままでのところ，600町歩の琉球マツの造林を終わりましたけれども，そのスラツシュマツは「石谷試験林」という名前にしてあります。

今年の春にこの写真を撮ってきたんですが，帰ってすぐ先生のところへ持っていったら，「やあ，石谷試験林，おれの名前をかぶせてくれてありがたいな」といっておられたんですがね。いずれにしても，昔の国有林でもあるし，この島の林業の開発には非常に興味をもっておられて，機会があるごとにあれはどうなった，どうなったと，熱心に聞いておられました。

佐藤　そのスラッシュマツの種というのは，日本でとれた種ですか。それともどこからか輸入された……。

白井　輸入された種だろうと思いますがね。

佐藤　そういうものを西表に植えられるのは，なかなかおもしろいことだと思うんです。ああいう暖かいところでは，針葉樹は琉球マツしかないですから……。石谷さん，目のつけどころがいいですね。

心残りなこと

松川　石谷さんの最後のお仕事というと，今年の全苗連第10回大会のことだと思いますが，栗田さんそのことについてお願いします。

栗田　さきごろ，全苗連の第10回の大会をやりまして，これが先生の最後のお仕事になったんじゃないかと思いますが，先生は非常にこまかいところまで気をつかわれ，なんとか第10回を盛会にしたいというお気持ちが，私ども事務をやっている者にありありとわかりまして，おかげで二千数百名を集めた，いままでにないような盛大な大会ができました。この大会に先生においでいただけなかったのを，ほんとうに残念に思っております。

そのときのことですが，先生はこまかい事務まで，一人でおやりになったということがわかりました。いろいろ事務局のほうに送っていただいた関係書類，それなんかも，全部自分でまとめられたようです。例の達筆で自

分でお書きになり，われわれのところへ送っていただいた。

最後の提案事項などをまとめられたのも，事務局にはぜんぜん手を入れさせず，自分で非常に真剣にお書きになったということを聞いております。そんなことで非常なご苦労をされた。

これが先生のおなくなりになる直接の原因になったんじゃないかと，いま私ども，非常に申しわけなく思っております。

松川　徳本さんは6月から協会の専務理事に就任いただいたのですが，短い期間ではあっても理事長・専務理事という間柄ですから特にお感じになったことがあると思いますが。

徳本　私は私なりに，石谷先生に関してはいろいろな思い出がございます。先般ご縁があって協会に入りました時，最初に，石谷さんが私をつかまえて，

「おい，おまえは健康上の前科者だから，ゆっくりやれよ。こういう協会の仕事というのはマラソン競争なんだ。短距離競争の選手になったようなつもりでやったら絶対だめだから，マラソン競争でいっしょにやろう」こういっていただいていながら，先生のほうが，短距離競争のような形になりまして，私はどうも残念に思うのでございます。

とにかくお忙しいお身体でしたから，私どもが先生の健康上の心配を口にいたしますと，

「なまいきなことをいうな。おまえこそ用心せよ。おれのことはおれがよく知っているから，おれのことは心配せんでもいい」こういう形で，なによりもかによりも，まず部下のことを考えて心配する。それが常にいちばん先にでておったということを，身にしみて感じております。いつも口ではきびしく叱っても，あとでは本当に親身になってその人のことを考えたり職員の病気などについては，人知れず心を痛めておられました。

松川　ほんとうにそうでしたね。あの豪快な容姿からは，ちょっと想像できないほどのこまやかな情を示される方でした。

小滝　さっき彼が最大の薫陶を受けた岩崎さんの話をしましたが，そのことのしめくくりを申し上げておきたいんです。岩崎さんは大正14年から昭和20年まで，秋田営林局におられて，最後は営林局長だったんです。まことにりっぱな方なんですが，やめられて，自分は故郷の岩手県雫石にお帰りになった。そのあとのお世話，これは私，ほんとうに申しわけないと思うぐらいなんですが，全部，彼がやりましたね。ああいう清廉な人だったので，雫石における生活は非常にお困りになった。また時世も困難なときでありましたが，いっさい彼が最後まで面倒みた。

実に彼は人間味があったということを，つくづく感ずるんです。

松川　ほんとうにりっぱな人でしたね。

本日は実のある豊富なお話を承りまして，まことにありがとうございました。時間がまいりましたようで，ここで終わりたいと思いますが，この座談会を通じて，石谷さんをかくも弔っていただきまして，協会としてもこのうえないありがたいことでございます。故人もさぞどこかで喜んで拝聴し，また苦笑していることと思います。

（34ページよりつづく）

付帯調査　土壌の断面を調べるとともに，一方では土壌をここまで育ててきた環境，すなわち試坑付近の土地条件についても調べなければならない。なぜならば，土壌生成に関与した気候・地形・動植物など土壌をとり巻く自然現象や自然物（土壌生成因子・土壌形成者）の状態を明らかにし，これらと断面の性状とをつき合わせることにより，各因子のの役割ならびに断面の特徴の意味をより詳しく知り，土壌の生因を容易に理解することができるからである。また後号で解説するが，環境と土壌の対応関係を正しく把握することにより，能率よく精度の高い土壌図を描くことができるということもある。

付帯調査の項目は，海抜高，地形，地質，方位，傾斜，植相などである。これらのうち植相は土壌形成者であるばかりでなく，土壌その他土地条件の反影でもあることを忘れてはならない。特に造林地では植栽木の成長状態を調べることにより土壌の生産力を知ることができる。なお，付帯調査の実施要領はこの章の範囲外なので省くことにする。

多数の患者に接してはじめて老練な医師になれるといわれるが，林業技術者も土壌の見分けかたに長じるためには，なるべくたくさんの断面に接することが肝要である。

石谷理事長のおもかげをしのんで

学生時代の石谷さん

〔紙パルプ連合会副会長〕
水野金一郎

君は，早生まれで小学校へ，小学5年から中学へ，また中学4年から高校へとトントン拍子で進学した。君が入学した鳥取高等学校は，全員入寮制で何はともあれ一年生の時代は例外なくだれもが寮生活を義務づけられたものであったが，君は，ただ一人下宿から通学した。一見，変くつな利己的にも見える行為でもあったが，その理由は，人に遠慮なく自分の好きな時に，好きな勉強をしたいといったひたむきな念願からでたものであった。

その証拠には，放課後などは進んで皆とともに遊び野球もテニスもしたし，また愉快にだれとでも交際もした。君は，この高校時代こそは，大いに実力を養うべき時代であると自覚していたようだった。したがって学校で教わる学科は一応の研修はしたが，君は，それ以外に各種の本を読んだ。就中，マルクス・レーニン等共産主義に関するあらゆる著書を読了した。それだけ勉強すれば，血の気の多い青年のこと，少しは口にも出したくなるのは人情の常，または，それに魅せられていわゆる共産主義者として君の人生を全面的に変わったものにしたかもしれなかったのであったが，さすがは，君は，このことについては絶対に口外しなかった。これを見ても君は，若い時代から物事を冷静に処理する天分が現われておったのがわかる。君が，林野庁の業務部長として労組との団体交渉に臨んだとき，はからずも当時のマルクスの勉強が役に立って嬉しかったと茶飲み話に述懐されたことがあったが，その時，はじめてその事実を話されたものらしい。

君は，大学に進むに当っては，最初から林学を修める決心がついていて，このコースの選定について，人の意見を求めることなどはしなかったという。

だいたい，鳥取県では有名な石谷財閥の尤なるものでありながら，家族や親族一統については，もとより，自分自身のことについても話すことはなかったし，また，私が君を知ったのは大学に入ってからであるので，以上述べたことについては，君と高校時代をともにしたO氏からの伝承によるものである。

さて，大学時代における君は，特に目立った存在ではなく，むしろ，どちらかといえば，引き込み思案のようにさえ見えるふしもあった。もちろん，毎日の学科も時たま行なわれた実習にも真面目にでて，決してさぼるということはしなかったし，時おり交わされる女性物語等には，超然として，まったく興味がないといった態度でいた。したがって，級友の大部分は，君を普通のきまじめな人間ぐらいに評価していたものが多かったようだ。

されば，君が，卒業後数年にして「秋田営林局に石谷あり」とかくかくたる名声がひろまったとき，あの石谷君が？　とふしぎに感じた同級生も多分にあったように見えた。

しかし，今にして思えば，君には，つとに将来あるべきうつわとしての片鱗が現われていたのであった。

「燕雀何ぞ鳳凰の志を知らんや」の言葉どおり，まことにお恥しいことながら，当時，私たちには，その君を洞察する目がなかっただけのことである。

まず，君の交際範囲は，私たちより相当に広いようであったし，また，その相手は，同輩よりむしろ先輩の方が多いようであった。

高校時代は学業のほか社会主義の勉強に取り組んだことは前述のとおりであるが，大学時代はそれとは全く方向を変えて漢文の勉強に没入した。後年，君が，よく筆硯を使っていたのは，当時の素養のあらわれでもあったろう。

かような修養を重ねた君は，すでに学生時代からしっかりした一つの人生観を持っていた。私たちは卒業を記念して，新宿の牛肉屋で解散の夕食会を持ったことがある。その時，今は故人となった福田君(元高知大学教授)が昭和6年林学卒を記念して「六林会」と命名した親睦会を結成して，末永くお互いの親交を持続しようと提案し，あらかじめ準備した規約等も披露した。もちろん全

員一致の賛同を得てその会は成立したが，その時，君は，最後に「この中からだれが出世しようと皆でその人を推してやろうではないか。変なしっと心を起こして人の足を引っぱるのは止めよう。また，だれかが不幸にして失意に泣くようなことがあったなら，皆で助け合っていこうではないか」と力強くつけ加えた。爾来，昭和6年組はなかなか仲がいいと人も羨むような団結を続けて今日に至っているのであるが，こうした君の提言が私たちの基調をなしておるからである。さて，その夜は，酒のいける者もいけない者もほとんど同格に痛飲した。当時，私は後者の方であったので，つい飲み過ぎて一人歩きすらできず，苦しんでいると，君は，「これでは君の下宿に帰るのは無理だ。俺の所に泊って行け」といって君は私を君のすまいに案内した。その時，君は一軒の家を借りて東京商大に通学していた弟君と同居しておられたようだった。翌朝，二人で朝食をとりながら今後の問題などいろいろな話を交わしたのであったが，その時，君は私に「俺はこれから，物事を処理する場合，細心に考え大胆に実行するということをモットーにしていきたいと思うが君はどう思うか」といった。その時，私は将来必ず大をなす人物であることを見ぬいたのである。君は，後半人の面倒をよくみるので有名であったが，その温情味は，すでに学生時代に窺われたのである。酒に悪酔いして困っている私をかいほうしてくれた一事でも理解できるのであるが，さらに好個のエピソードをご紹介いたしたい。実は私たちのクラスにTという硬骨漢がいた。ところが彼氏は卒業を間近かに控えて，まだ5課目の試験にパスしなければならなかった。ところが，明日は一日で三課目の試験を受けねばならず，到底合格の自信もないことから，卒業は一年延ばせばいいんだと半分やけ気味で下宿でごろねをしていた。その時，君は，2名の学友とともにT氏の下宿をたずね「おそらくこんなことだろうと思ってやってきたんだ。これから，われわれ3人で分担してやまをかけるから，それまで安心して寝ていてくれ」といって，翌朝3時まで徹夜でがんばって，やまをかけてくれた。3時に起こされたT氏は，その友情に感激してやまのかかったところをむさぼるように詰め込んで受験したが，それが美事に適中してめでたく卒業することができた。先般もそのT氏がやってきて，石谷君には単に学生のときばかりでなく，卒業後も何かとご厄介になった。そのご恩は一生忘れられないと，くり返しくり返しいっていた。

大学の卒業式も終って4～5日もたつと，同期生も三三伍々と東京を離れていく。私もそろそろ郷里に帰えろうと思って，君のところに挨拶かたがた遊びに行ったら，君は，玄関前の庭先で，うづ高く積んだノートを一冊ずつ取り上げてはちぎり，これを焼却していた。

私は，なかばあきれながら「君!!　なにをしているんだ？」とたずねたら，「これから，こんな学校のノートには用がないので焼いているのだ」といった。そして，君は，なおも続けて「学校は人生修業の道場であって，わずか2～3年でかじったような学問なんか問題ではないよ。真の勉強は，これからさ」ともいった。その言たるや尊し。

さすがに，君の真の価値は，学校を卒えてから発揮されたのであった。

大学時代，前列右端

秋田営林局在勤当時

〔林野弘済会秋田支部〕
藤井敏也

仕事熱心

先生が昭和6年5月秋田営林局計画課に入ってから主に，秋田スギ天然生林の中心である，羽根山（今の合川署），沖田面（上小阿仁署）両事業区の経営案の検討や，スギ林の蓄積と成長量を正確に求めるため設けられた，固定標準地の再調に出られ，昼は山，夜は計算や更新論など，仕事の連続であったと聞いている。

その頃山林局で当局の択伐更新法が，論議されてきたが先生が主査となって「秋田スギ天然林の基礎調査」の班ができ，林分構成，植生，土壌その他，細密の調査をしておった。

論客で遅くまで議論のつきない人であった。また仕事熱心で，よく勉強され，かつ研究心の強い人であったので頭角をあらわして，10年頃には林業技術の幹部候補生と目されていた。

そして岩崎計画課長（13年経営部長に16年局長になられた）の信任厚く，時々課長室に呼ばれ，話合ったり，傍の机で書いている姿が見られた。また山林局の照会に対する回答資料一切の取纏めは，先生がなされておった。

まったく仕事にかけてタフで，昼夜の別がなかった。ある日残業しておったが，午後8時頃部下のT君に，「僕は計画課長のところに行ってくるから，帰らんで待っておれよ」と言い残して課長室に行かれたが，課長との論議は長くなって，10時になっても戻って来ない。T君はしびれをきらし，言われた仕事をまとめ，どうせ話はあすだろうと，下宿に帰ってしまった。翌日出勤して来て「なんでだまって帰ったのか」とお目玉，その日は夜の12時まで，仕事をやられたとこぼしておった。

部下思い

仕事にはバリバリだが，部下思いの心の厚い人であった。仕事の区切りを見て「オイ町へ出て飯を食おう」とよく誘っておられたが，しかしT君ら若い者を飲屋には誘わない。よく稲福に行って，おしるこやケーキをご馳走し，時にはお宅の夕飯に誘い，奥様の手料理をいただいたと申しておった。また東京に出たとき，T君に三越から，ネクタイを買って来て，これが君に似合うだろうと言われ頂戴したそうだが，ご本人はいつもあまり新しくないネクタイをつけておった。

結論を考える

人には石橋をたたいて渡る慎重派もあるが，石谷先生は常に結論を念頭において，決断し直進しておったと思う。ある時補助員に，薪炭林の調査を命じたが，普通ならば，何林班の何小班で何haの標準地によって調査するように言うが，その時は何林班で，樹齢30年位の薪炭林で蓄積ha 90m³ 程度の林分を選んで標準地をとるよう，むずかしいお話であったという。これは矮林択伐の林型作製の，資料とするものだったらしい。経験上から構想がすでに，念頭にあったと思われる。

森林主事の教習

昭和12年の森林主事教習の森林経理の講師は，岩崎課長であったが，課長が忙しく，1人1人について，採点する時間がおしいため，石谷先生に命じて，問題の文は長くとも，答が簡単に出るものを選ぶよう，指示された。その中の森林経営の目的についての問題だったが，文は遠因的とか，根源的とか，聞きなれない字句で，長たらしい問題となった。意図した簡単な名回答は，誰からも出ないで，おおむね長文のものが多かったという。あとで先生から聞いたが「森林の緑化にあり」が満点であると言っておられた。教習生は一つでも，多く書いて点を取ろうという，心理が逆であったわけで，苦笑したものであった。

優れた記憶力

計画課に入った当時，調査された個所は後々まで，記憶されておった。林野庁の計画課長時代来局され，沖田面事業区濃沢国有林の蛭沢を見られた。私も角館営林署から，計画課に戻っておったので，同行したが，先生は，このようなスギを主体とした優れた多層林は，100ha 位保存するよう指示された。ここは明治26年に，能代の製材業者（四国の人，久次米正次郎氏が能代へ来て，後の秋田木材の社長井坂直幹翁との共同事業をしておった当時で今の秋田木材の前身である）が払い下げをうけ，70%以上伐採したが，この現存林は，それから更新(天然)され成立した，と話されておった。その優れた記憶力には感心した。

× ×

先生が秋田営林局の計画課に入ってから，現在まで35年の長い間ご高誼に預り，また大変お世話にもなり，その思い出はつきない。今は幽明境を異にしてしまった。先生を追憶し，謹んでご冥福をお祈りするものである。

山瀬営林署長当時を思う

〔紙パルプ奥羽ブロック協議会〕
伊藤陳重

私が先生のご面識を得たのは山瀬営林署に経営案の用務でご出張になった昭和13年と記憶しますが，その後，昭和15年に山瀬営林署長としてご赴任になられて部下となったのでございます。

今このことを書くために，秋田営林局の「八十年の回顧」で調べましたところ，昭和15年5月16日から昭和15年8月11日までのわずか3カ月に足らないご在勤となっ

ておりました。私の記憶からするならば1カ年以上はご在勤であったように思われてならなく，実は二度も見直したほどでした。それほどこの短い期間が私どもには大きく，永く影響力があり，思い出も数々であって，若くして偉大であった先生が偲ばれてなりません。

先生が山瀬署長にご赴任になられたのは31歳でございましたが，全く決断力のある清新な感じのする署長さんでありました。私は今も引継の日の署員全員で写された写真を持っておりますが，髪ものばされず眼鏡をかけ，若々しい美男子の署長さんでありました。

（眼鏡を必要としたいようになったのは敗戦後南方に抑留されておるうちに栄養失調になって，それが因で眼鏡を必要としないようになった，と先生から直接お伺いしました。）

思い出を2，3書かせていただきます。

△　△　△

当時私は庶務係の雇員でしたから，着任の日早口駅頭に出迎えましたがこれを末長く忘れずにおられました。また米内沢にご栄転になった時は，米内沢営林署までご赴任に随行しましたが，この時お嬢さんがご病気中を無理してご赴任になり，阿仁合線の混雑する中を抱かれて二等車（当時の）のない不便を申された記憶が，今もありありと目に浮かびます。

△　△　△

山瀬にご赴任なった日に，前任署長の杉原定衛さんが同じ計画課ご出身の親しみから例の調子で「君，引継に捺印する印鑑位は持って来ただろうね」と申しますと笑いながらポケットから小さい木製の印鑑をお出しになりました。後年先生が業務部長当時，私が酒田営林署の経営課長で，東京大学で行なわれた林学会での雪害の研究発表したあと，長野，東京局管内を視察するに当り，唯一人の初めてのしかも末輩なので先生に紹介状をいただくためお伺いした時は，やはりこの印を使っておったと記憶します。そして長官になられて初めて新しい印をお作りになられたと聞きました。

この時の私の管外視察は先生がそれぞれご紹介の電話をしていただいたお陰で，末輩の私がまったく何不自由なく行届いたご案内を受けてまいりました。今でも大変よい思い出となっております。

△　△　△

山瀬当時，今は亡い担当区のK氏が，何か民間人との間に紛争を起こしたようでありました。この内容についていては私は詳細は知らないのですが相手は後年北秋バスの社長になった方のはずです。このことは直接営林署の業務には関係のないことのようでしたが，K氏が困ってることを見兼ねて解決してやったようでした。

この時先生が次のようなことを申されたことを記憶しております。

君達署員が善意をもってやったことは結果はどのように悪くなっても俺は助けてやるし，とる。しかし悪意をもってやったことは結果はどのように良くとも，とらない，と。

この言葉はその後の私の信条といたしました。

ごまかしのない。真実を愛する。努力する者をお引立てして下さる方と信頼してやまない方でした。

△　△　△

当時先生の方針として林間放牧をやっておりましたが契約者がどうしても柵を作らないので私に柵を作るまで監督して出張先から帰るなと厳命をうけましたが，二度出張しても人は来ない。作った柵も申しわけ程度で牛は逃げ出して軌道に出るで，林間放牧に猛烈に反対したことがありました。しかし私が鶴岡在勤中林地の集約利用と，国有林野開放に対する対策等から林間放牧をやりましたが，今は電流を通ずる柵もできて今昔の感にたえないのですが当時から林間放牧を許された先見の明には敬服の至りであります。

先生は厳格であって情深い方であり，そして部下思いの方でありました。

署長時代の石谷さん

〔元大館営林署〕
小林堅藏

石谷先生が米内沢営林署長としてご赴任なったのが昭和15年8月12日付，津曲署長と交替になり，翌16年1月20日付で山林局にご栄転，その間約半年の短い在任であった。私は当時森吉担当区詰であったので，署内においてのことは，よく記憶にはないが，今印象に残っていることを1，2書き述べたいと思う。

◎事勢引継の日

当時の署長事務引継とあれば，職員一同厳粛な気分が漲っておった。それに新署長を迎えるには，庁舎玄関に整列して出迎えるのが通例のようであった。そして職員間の陰話ながら，石谷大物署長とあって緊張感も一入であった。いよいよ当日事務引継の時間も切迫し，おいでを待っていたところ，玄関から来られるものと予想していた。ところがさにあらず，署長官舎の廊下伝いに「ガタッガタッ」と足音がするので，さてはおいでかなと思っていたらそのまま庁舎署長室へと入られた。うろたえたのは主任連中，目を「キョロキョロ」するばかりである。見たところザンギリ頭に，白チョッキ，モーニング姿に衣を正したまではよかったが，履物はと見たら「ツッカケサンダル」とは驚き入った。石谷署長のご人物については局計画課時代も長かったので，私が上小阿仁署在勤時代よく沖田面事業所に来られ，幾度となくお会い

営林署長時代

し，およそは存じておったので当日も別段意にはとめていなかったのですが，事務引継後署員曰く，「真夏のこととてモーニングではさぞ暑かったろう」!! それに「ツッカケサンダルとはまた変わっているね」!! と当時の世相からして笑うに笑えない印象の一つです。

◎ブナ材と斗う

米内沢営林署はご承知の通り森吉山麓小又川流域のぼう大な面積をもつブナ林の宝庫である。それだけにブナ材の生産に当時としては期待されたのであった。生産量は年間15,000m³～20,000m³と思うが，ブナ材のほか，テンスギ，ヒメコマツの生産も幾分あったようだ。運搬系統は前田貯木場より30km～40kmのオール機関車運材，しかも木炭による代燃機関車であった。一方前田貯木場には年間10,000m³位を消化する施設完備の直営製板所があり，まことに華やかなものがあったが，いかにせん運材能力は十分ありながら機関車運材が計画通りスムースに行かない。いろいろと原因もあったが第一に遠距離（1日1往復位）の上に林鉄路線も急勾配に急カーブ，路盤軟弱個所も多く，また，代燃機関による故障続き，それに木製貨車に堀田式ブレーキとある。一方Ⅲ口座事業地点までの林鉄が延びないままに事業の進行，等々が重なり，あわせて日ごとに貨車，機関車の脱線転覆事故，時には重大災害も発生した。落木はオーバーな話かもしれないが線路側に列をなしていた。このように不振な状態で計画生産の50%～60%で精いっぱい，生産性低下の連続で，山床では滞貨に次ぐⅢ口座と繰り返えし当時「なめこ」の原木を作るようなものといわれ，また米内沢（ヨウナイサワ）小又沢（コマツタサワ）と口ぐせに相言葉で表現したほどでした。いわば米内沢署の癌でもあった。

ちょうどその折りも折，石谷署長の新任となり，米内沢署の癌解消，いわば生産量の完遂と汚名挽回を主眼に赴任早々から，ブナ材との戦いが始まったわけです。当時としては悲愴な覚悟のほどが伺われ，毎月の定期出署日も返上ということで全精力を第一線事業現場に傾注したのである。

ともかく石谷署長は署内の要務多忙な日以外は前田貯木場に陣取り，署員を激励するそばから，運材の計画生産遂行とダイヤの正常運転，あわせて安全運転の確保を重点目標に自ら陣頭指揮をとり，朝一番出発の先頭機関車に，しかも助手席に乗ってこられた。一見したところ若者助手とも見られず，どっかの「オッサン」のような身なりで色褪せた「ハンチング」に作業服，首に手拭を巻き，高丈履き，いかにも平凡な飾り気のない現場姿であられた。しかし当時としては，署長が陣頭指揮をとられたことは，異例のことで，大方の作業員，部落民は，署長の顔すら見たことがなかったので，村長より偉い人，神様の次位に考えられていた時代のこととて，不思議に思われたほどでした。それが雨の日も，風の日も，吹雪の日も厭うことなく，朝一番列車，夜は終列車と連日のように続けられ，自ら率先躬行，積極果敢に実行され，以前と一変して整然と運材列車の運行されるありさまを見られるにつけ，当時われわれ現場職員として真に頭の下がる思いでありました。

これらを思うにつけ石谷署長のとられた率先垂範「やればできる」「おれについてこい」との敢闘精神，そして高潔な人格を忍ばれるとともに若かりし頃の石谷先生を懐しく思い出されるのです。

石谷一等兵

〔国策パルプ木材部長〕
森田　進

昭和16年7月のある日，当時東満州国境の虎林（旧満州国東安省）駐屯の輜重兵第11連隊に勤務していた私は，公用外出していた兵隊から陸軍病院で会った他部隊の兵隊に私に手渡してくれと頼まれたと，小さくたたんだ紙片をうけ取った。開いて見ると，

「つい最近当地に来た。できるたけ早い機会に面会に来て欲しい。石谷憲男」

とあり，所属部隊名が書いてあった。

石谷さんが虎林に！　驚いてその兵隊にさらに石谷さんに会った模様を聞いてみると，虎林の陸軍病院に入院中の戦友に郵便物を届けに行ったところ，たまたま来合わせた他部隊の兵隊が，戦友のベットにある所属部隊名を見て，この森田隊の隊長はこうこういう人かと尋ねられたので，そうだと答えたら，それならとノートを破って走り書き，これを隊長に渡してくれと頼まれたということである。かれの話すその兵隊の風貌はまさしく石谷さんである。石谷さんが虎林に来ている。

昭和12年5月，学校を出たばかりの私は，秋田営林局計画課に配置された。当時の秋田営林局計画課は，岩崎準次郎課長のもとに施業案技師鈴木菊義さんはじめ石谷さん，小滝武夫さん，原忠平さん，内田映さんの諸先輩が主査として机をならべておられ，私は，「スギ林天然更新の基礎調査」担当の石谷さんの班に編入された。ここから公私にわたって石谷さんに甘え叱られながら山官としての生涯が始まったのであるが，その後の徴兵検査で甲種合格を申渡され，年が明ければそうそうに現役兵として入営することがきまっていた私は，それまでの幾許もない日々を恵まれた環境の中で愉快に過ごした。そしてその年の暮，石谷さんのご自宅で，誕生間もない憲一郎君を膝に乗せた石谷さんご夫妻の心からなる壮行のご馳走にあずかって帰省，輜重兵第11連隊に入隊した。入隊後も石谷さん，小滝さんから時に応じて激励のお便りをいただきながら軍隊生活を続け，14年4月以降さきに渡満，虎林に駐屯していた原隊に復帰していた。

昭和15年独ソ開戦以来ソ満国境の緊迫感は次第に高まっていたが，16年夏関東軍に動員下令せられ，増強部隊が内地から続々渡満しつつあった。石谷さんもこの中におられたのである。

私は石谷さんの所属部隊の所在を調べた。それは私の駐屯地から10キロばかり離れた所の急造の仮兵舎にいる方面軍の兵站部隊である。私は早速その部隊を訪ねた。中隊付の准尉に来意を告げると，石谷一等兵はちょうど中隊事務室にいると案内してくれた。その中隊事務室のアンペラ敷の床に正坐して石油箱を机にガリ版の鉄筆を走らせているのはまさしく石谷さんである。石谷さん，と声をかけると，パッと立って不動の姿勢をとられ，

「お久しぶりでありました。」まことに思いもかけぬ石谷さんにお眼にかかったものである。石谷さんの中隊長は，外出はまだ許されていないから私の部屋で面会してくれと中隊長室を提供してくれた。今度の奇遇のいきさつ等，話はつきないが，どうもここは窮屈だ，兵室へ行こう，と言われるのについて行くと，その入口で，ちょっとここで待て，と一足先にはいられ，大声で，

「今，ここへ他所の部隊の将校が来るが，これは私の学校の後輩であり，職場の後輩でもあるものだから，皆さん，敬礼はよろしい。そのままでいて下さい。さあ，はいれ。」

石谷さんの寝具類等重ねてある場所に坐ると，石谷さんは

「まあ楽にしてくれ。寝ころんで話ししようや。」

とはじめてくつろがれて，秋田の石谷さんにかえったようだ。私はその日，馬で来ており，鞍嚢に詰められる限り持って来た酒と煙草を慰問品だとさし出した。

「ありがたいが，酒も煙草もあきらめた。これはせっかくだから戦友達に分けてやろう。」

私にすぐ何かできることはないかと尋ねると，

「キャラメルか氷砂糖かなにか甘いものが欲しい。この次に頼む。」

岩崎秋田営林局長はじめお世話になった諸先輩の近況等聞けて懐しい話が続いたが，石谷さんは今回が二度目の応召であること，最初の時には補充兵ながら現役の初年兵教育の助教まで勤めたこと，銃剣術にかけては中隊屈指の腕前であること，とその士気旺盛なのに驚嘆した。さきほどの中隊付准尉が，石谷一等兵は中隊の模範兵だとほめていたのもうなづけた。

その後，私は日曜日には努めて石谷さんの所へ出かけた。酒をあきらめていた石谷さんも心身の余裕が出てきたらしく，

「私の分隊は分隊長以下13名いるが，みんなでほんの

りできる位の酒が欲しい。」

ということになったり，

「うちの分隊長は馬に乗りたくてしかたがないんだ。素人でも乗れるおとなしい馬で来て，いっぺん乗せてやってくれよ。」

石谷さんの分隊長以下の戦友達とも近づきになった。石谷さんはまわりから，「石谷」，「石谷」と尊敬され，親しまれてその中心になっていたようである。これはけっして私との関係のせいではない。

いよいよ石谷さんの部隊の兵隊達も外出が許されるようになった。中隊長は石谷さんの外出の時間を特別に延長してくれた。私達は虎林の街の満人家屋を改造した店（看板には割ぼうと書いてあった）で，腰を据えた。

「ところで石谷さん，虎林の街には憲兵隊から特別に許可されている写真屋があるんですが，そこで写真を撮って岩崎局長や皆さんに石谷さんのお元気なところをお眼にかけようではありませんか。林曹会報にも載せて貰いましょうよ。」

「いやそれだけは勘弁してくれ。手紙ででも元気でいることは知らせられるよ。」

この機会を逃したことは今日でも私はきわめて残念に思っているが私の５年に近い軍隊生活のなかで，石谷さんとの数カ月が一番強い印象となって残っている。

北満の夏は短い。青々と涯しない草原が一夜で褐色に変わるとすぐ酷しい寒さが迫ってくる。そんなある日，

「どうもおかしいと思うのだが，先頃配布された防寒被服がまた返納させられた。ここでわれわれが越冬するとすれば防寒具なくて済まされるものではあるまい。情勢が変わってきているのではないか。君の方の部隊に格別な動きはないのか。」

なるほど関東軍の動員もその後特別演習と呼ばれているし，対ソ緊迫感も一時よりは薄れてきているようだ。だからと言って私などの情勢判断の及ぶところではない。その次面会に行った時は，石谷さんは夏衣であり，その部隊にはあわただしさが感ぜられ，外出も許可されなくなっていた。

「冬服まで返納してこの通り夏服が支給されたんだ。いよいよ関特演も終りわれわれ増援部隊は内地へ帰還するらしい。一足先に帰ることになるようだが，君ももう長いことだしそのうちには帰してもらえるだろう。今しばらく健康に注意してがんばってくれ。君の帰りは私が受入れを準備して待っているから。」

16年11月のはじめ石谷さんの部隊は消えるように虎林を発って行った。後にして思えば，その部隊は石谷さん達が期待したように内地へ帰還するのではなくて，その後間もなく始まった太平洋戦争に備えて遠く南方へ転進して行ったのであった。

兵長時代

陸軍兵長の頃

〔林業土木コンサルタント・前稿支所〕
相沢平悟

私が南方総軍司令部総監部産業部農林班にＳ技師と共に派遣されたのは昭和18年７月であった。当時，石谷先生は前歴が山林局技師であることから南方占領地に軍政が布かれると同時に軍籍のまま軍政総監部に配属されていた。階級は一介の陸軍兵長であった。

照りつける炎天の街を腕に公用章を巻き額の汗を拭いつつ雑沓の中をわき見もせずに，木材その他林産物の需給調整の状況を調査して歩きまわっている半袖半ズボンの先生の姿を，私は今でもまざまざと思い浮かべることができる。

当時の軍政総監部は主要な地位はすべて職業軍人が占め，その下の各専門部に文官の軍政要員がつけられていた。軍政要員の大部分は営外居住し，午前10時から午後５時までの勤務であったが，先生は兵長であるがゆえに営内居住し，20歳前後の若い徴用軍属と起居をともにしておられた。

軍政要員は勤務時間内を除けば行動は自由であり，何

等不便を感じることはなかった。しかし，いわゆる職業軍人に比べれば，かなり差別待遇されており，それに対して不平不満を抱くものも多くかつ戦地という特殊な環境のせいもあって，夜は麻雀もしくは歓楽街に浮身をやつすのが常であった。私も恥ずかしいながら，その一人であった。こうした毎日を送っている私達に，先生はある日次のようにいわれた。「君達は現在の待遇に不満をもっているようだが，それはまちがっている。多分，君達は内地の勤めでは謄写版刷りをやらされはしなかったろう。しかし，人間は自分に与えられた仕事を忠実に実行するのはもちろんのこと，その仕事を通じて向上しようとする努力が必要なんだよ。たとえ，謄写版印刷でも，それが自分に与えられた仕事であるならば，原紙は字の上手下手よりも人が読みやすい字を書き，印刷された所要枚数は一様に鮮明に刷上がるよう，気をつけねばならない。

そのためにはどうすればよいか？

鉄筆の使い方にも工夫があるだろう。

インキの濃度にも十分注意しなければならないだろう。つまり，現在，自分の前に置かれている仕事に研究心を持って打込むことが必要なんだよ。そうすれば自然と仕事に興味もわいてくるものだ。こんなことは君達は子供じゃないんだから十分承知しているのに，その気持ちになりきれないから，おのずと不平不満が起きてくるんじゃないかね。」と言われた。私達は一言も反論できなかった。このような一面もあったが，反面なかなか話のわかる兄貴でもあった。私が麻雀の約束があるのに，その日の時間内に終りそうもない仕事も抱えていると，「君はさっき麻雀に誘われていたね。後は俺があすの出勤時間までにやっておくよ。だけど徹夜して身体をこわすようなことだけはしてくれるなよ。」と言われることもあった。また，先生は私達にばかり，思いやりを示されたわけではなかった。外出が自由にできる私達に，「君達は外で何でも食べられるが，営内居住の者はそうはいかん。たまにはトンカツでも持って来てくれ。」と言うので，さっそく，翌日，トンカツを持って行くと，昼食時に若い徴用軍属と分け合って食べておられたものである。

営内にあって，若い人の面倒を見，かわいがるのも格別であり，親が子をいたわる如く，どんなことにでも相談にのっておられた。

当時，私はいつも不思議に思ったものである。なぜ，軍隊というところは石谷さんのように有能な人材を兵長のままにしておくのだろう？　現地で除隊させ，軍政要員として迎え入れ，縦横に腕をふるうチャンスを与えたならば，どんなに仕事にプラスになるかもしれないのにと……しかし，先生は営内にあって，しかも階級が低く随分と不自由な環境にありながら，モクモクと縁の下の力もちの役割を果たしておられた。与えられた自分の職務に専心しておられる先生に私は深い感銘を覚えずにはいられなかった。

森林計画と石谷先生

〔熊本営林局経営部長〕
小　畠　俊　吉

「便所とは本来クサイものだ」と大喝され，私は目を白黒。石谷先生の名前を耳にするとき，すぐこのときの光景が脳裡をかすめ，おかしいような，厳粛なような気持ちに襲われる。

今では国民の生活水準は，昔とは比較にならぬほど高くなったが，戦後復興期の日本では大都市を除いて，水洗便所は〝高嶺の花〟。それを営林局に作るのは至当だとする私と，時期尚早だとする先生の意見が対立して，あげくの果に大喝された次第。特別会計になってから日の浅い時代の国有林は，現在と同じように収支のバランスをとるのに苦労していたが「庁舎の施設は多少の不便は忍んでも造林や林道などの資源充実のために，優先的に予算を使うべきである」これが先生のご意見であった。

今では，その頃と同日に論ずるわけにはいかないが，森林施業に直接従事しているわれわれは，まず森林資源の充実に努めるのが第一の責務である，ということは変わっていない。しかし林業内部あるいは外部のいろいろな事情のために，伐採跡地の造林が進まなくなっていたり，適正な伐採量を相当に超過する伐採が行なわれていたり，また伐採による収入がまったく資源再造成のために費やされていなかったり……等々の嘆かわしい現象が起きている。石谷先生は常日頃このことについて心を痛め，日林協の事業活動を通じて〝魅力ある林業〟の確立に努めておられたが，われわれもまず森林資源の充実を第一義とすべきである。

現行の森林計画制度を創設されたのも先生であるが，同時に森林計画あるいは国有林の経営計画策定のための森林調査業務に，空中写真判読や空中写真測量を他産業にさきがけて導入したのも先生だった。生前よくこの頃

の話をされては「怪我の功名といおうか，窮鼠猫を嚙んだというべきか」と述懐されておられたが，もともと資料の少なかったうえに，戦争のために支離滅裂となったわが国の森林資源の把握に，なみなみならぬ苦心を払われ，持前の不屈の闘志でこれを乗切られたばかりか，画期的な森林調査方法を確立された。

今年4月1日，林業基本法第10条に基づく〝森林資源基本計画〟と〝林産物需給の長期見通し〟が閣議決定され，さらには林政審議会から〝政府は森林資源基本計画を達成するため，経営主体における森林の計画的施業の促進に留意せよ〟との答申がなされ，これをうけて第4期森林計画制度の検討を続けているとき，日林協関係の会合などで先生とお会いすると，必ず次期森林計画制度と空中写真の活用についての質問をうけた。われわれ林業に従事する公務員は何をおいても森林資源の充実を図るべきである，という信念の先生であったから，森林資源基本計画や新しい森林計画制度に強い関心を持たれていたのは当然である。

森林資源基本計画を達成するための森林計画制度の問題点は，林政審議会の答申にあるように森林の計画的施業の促進であり，その裏付けとして資源充実のための財政投融資の強化と外材輸入の適正円滑化にある。森林の計画的施業が種々の原因のために行ないにくくなってはいるものの，森林所有者の全部がそうなのではない。全国森林計画の計画量に対し伐採材積，造林面積ともに約9割に達していることがこれを示している。

しかし，数多くの森林所有者の中には，国が望むように伐ってくれず，植えてくれない森林所有者もいて，これらの人々には一方的に「計画的施業の促進」をおしつけても仕方がない。所有者自身に計画的施業が得であり，伐ったり，植えたりの仕事をやりやすくする必要がある。伐らず植えずの原因は多々あるにしても，その主なものは，伐れば税金，植えるに労力無く高賃金，将来木材は余る……などである。先生が空中写真の多角的活用と省力林業の確立に熱心であったのも，林業技術の面からこの原因を排除しようとするものであった。

日本の林業界に偉大な功績を残された先生はもういない。しかし「本来便所はクサイもの」翻訳すれば「林業に従事するものは，自分の生活環境の向上を考えるときには，山をりっぱに仕立てるにはどうすべきかを一緒に考えて，しかる後に金を使え」の精神は，永遠にわれわれの心に生きつづけるであろう。

航空写真と石谷先生

〔森林開発公団福岡支所長〕
高田秀男

誰もが，50の坂を越えると，やれ腰が痛い，肩がこる，ということになり，人生のたそがれを意識するものである。親しき友と逢えばお互いの子供のことか，健康の状態を尋ね合うのが常である。

去る9月初め，支所長会議で上京したとき，幸い石谷先生にお逢いする機会があったので，久し振りの会合を約束することができた。3日は初秋の良い天候であったので，早朝池袋をたって大宮行きの電車に乗り，浦和の石谷先生を訪問することができてなによりであった。先生の書斉で半日を過ごしたが，その日が永遠の離別となろうとは，夢にも思わなかったことである。先生は常々自分の健康には相当自信があったものか，健康問答には気嫌が良くなかった。しかしあまり顔色が良くないので開口一番，「先生の最近の健康はいかがです？」と聴いたところが，予期した通り，きわめてブッキラボーに「この通り元気だよ」とのことであった。そうして君こそ肥満しているので注意しなくてはと逆襲された。そこで自分が終戦以来実施している「西式健康法」を一席やって，先生にも実行方を奨めた。その要点は，第一には清水を毎朝食前に一升位飲むことである。第二は竹枕（孟宗竹の1尺2寸位のものを二ツ割にしたもの）を使用すること。第三は毎朝起床の際，脊髄運動（頭を100回位左右に動かす）を実行すること。なお先生が嫌われるのもいとわず，最近の血圧について伺って見たら，好ましからざる表情で，「そんなものは測らんよ」とやられたので，石谷先生との健康問答はやめにした。今から思えば血圧は相当気になっていたものと思える。医師の診断で休養を宣告されることを避けられていたのではないであろうかと心残りがしてならない。他人のことについては，あんなに親切に，積極的に，なにくれとなく気を使って下さった石谷先生であったのに，なぜか？　自分のことには，あまりにも冷淡過ぎたのではなかろうか。あるいは不養生ではなかったか？　このことはまた，お互いに自分の健康についても反省させられる教訓でもある。

かつて熊本県林務課の施業係長時代であったとき，終戦後の日本の森林の実態を速やかに把握して，戦後復興資材の生産確保と，乱伐跡地の造林推進を計画化するため，民有林簡易施業案編成業務が予算化され，昭和22年より５カ年計画で実施された。ちょうど23年９月（全森連主催）の「山口九州ブロック」の講習会が熊本県で開催されることになったので，有名な急流球磨川にある山の温泉人吉市において計画した。その当時は林野庁より計画課長であった石谷先生が来席せられ，各県担当職員や森林組合職員等約150名の者を前にして，午前３時間，午後４時間のぶっ通しの講義を聞かされた。まことにファイトマンの課長であった。自分はこのとき以来，石谷先生との交誼が始まって今日に及んでいたのである。昭和25年２月と思うが連合軍総司令部は，経済科学局公正取引部と天然資源局林業部との共同声明として，森林計画制度と森林組合の制度改正を指示する勧告文を日本政府になされた。林野庁としては，森林法改正原案策定のため各地区ブロック代表者をあつめ協議が重ねられた。幸い自分は九州代表として数回呼び出しを受けその審議に参画することができた。今は20時間足らずの特急で行ける東京も，その頃の急行では36時間以上も要し，かつ飯米持参の上京で苦しい出張であった。したがって審議会に出席したときは遠慮なく愚論を吐き，石谷課長の激昂をかったこともたびたびであった。幸いにして小幡班長や若林係長（現林野庁長官）のご指導により無事に代表としての任務を果たすことができたことは何よりであったが，改正森林法の中で特に記憶に残ることは，伐採制限に対する条項であった。国土保全と木材需給調整のためとはいえ森林所有者の所有権を制限する法律は，新憲法下では不可能である。もしこの原則をとるならば，伐採制限に対する国家的補償の措置をとるべきであることを強調した。伐採調整のため林業金融制度すなわち「伐調資金制度」が採用されたことは楽しい思い出のひとこまである。また森林資源の確実な実態把握のため，民有林調査に航空写真を利用することを石谷計画課長の勇断により決定したことはまことに大なる功績であると思う。もちろんその当時原忠平さんや堀正之さんの助言はあったとしても，占領軍である米軍の航空写真を戦災復興と経済再建のために，日本政府機関が利用することが認められはしたものの，他官庁や各産業部門ではまだ使用していないものを森林調査に卒先して利用することにして，民有林関係者を24年８月頃浅川実験林に集め利用方法についての講習があった。自分も受講した一人であるがまことに難解であり，取り付き難い新しい技術であった。しかし強引な林野当局の指導と，石谷先生の熱情に鞭撻されながら地貌図作成や現地判読の方法を学び，帰って職員とともに，森林調査業務に当った。その時，特に苦しめられたのは米軍の貸与物件であるので「写真は１枚でも破損紛失は認めない。もし紛失せる者は，琉球への強制労働を命ずる」とのきつい条件付のシロモノであった。ところが不幸にして熊本県の菊地川流域の調査班員である某技師が１枚紛失することがあった。ただちに石谷課長に連絡して善後措置の指示を求めたが，実に鮮やかで大胆なご回答で，安心したのであった。すなわち「写真１枚で流罪など，馬鹿げていることだ。なんら心配することなく，事業を進めて行かれよ。」とのことであった。はたせるかな25年12月と思うが，黒坂と言う二世が下級将校を２名同道して，熊本県に貸付けている航空写真の検査に来県した。自分としても，借用写真の保管には最善を尽し，特別ロッカーの中に４ツ切写真の台帳十冊を用意せしめ，全写真の破損防止につとめていたので，現地貸し出しの写真照合までは消略されて，大したこともなく，検査を了したこともあった。こんな馬鹿馬鹿しい事件は黒坂氏のいる間は，林野当局と地理調査所の間にもまして，その作業を請負った測量会社もなみなみならぬ苦労があった模様である。その苦難を押し切って，航空写真の利用による高度な森林調査や地図の作成を，今日の技術まで育成された基盤は，実に石谷先生の先見の明によるものと言っても過言ではないと思う。

まだ限りなく思い出はつきぬものがありますが，このあたりで拙筆を納めさせていただきます。

隣人石谷憲男さんの思い出

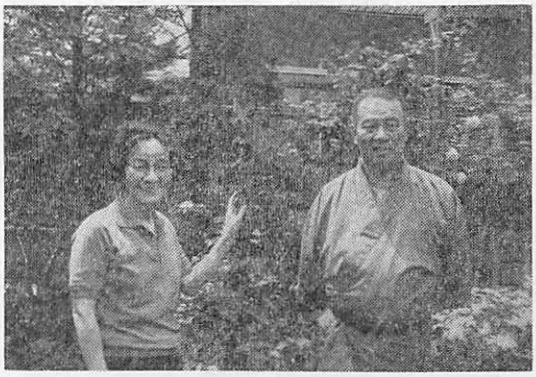
〔全国公団造林協議会連合会〕
片　山　佐　又

人の寿命というものは，平素の丈夫さには必ずしも比例しないものであることを，むざむざと見せつけられた気がする。

去る９月16日の夕刻であった。私は石谷会長に用事があって，東京四谷にある同建物内の先生の室を訪れ，10分間ほどお話をした。そのとき私は，先生の言動に日頃の活気が見られず，心ひそかに，タフな先生も，たまには千客万来の応対に疲れることもあるのかと思いなが

ら，それ以上に格別の気にも止めずに辞去した。そのわかれ際に先生は，これから全苗連事務所に立寄ってから帰宅する，とのことであった。しかし，後になって知ったことだが，その日は全苗連には立寄らずに真直に帰宅され，ご自宅において夕食途中で，病床に就かれたのである。最初は軽微な脳出血で，数日間静養すれば回復するとの医師の診断であったが，同月20日遂に不帰の客になられたのである。そのような次第で，石谷さんと職場において，向かい合って話をしたのは，あるいは私が最後であったのではないかと思っている。

私と故先生との出合いは今から20年前である。終戦後間もなく私は，田舎の営林署から林野庁(当時は山林局)勤務となった。赴任してみると，東京一帯は戦災により一面の焼野原の状態で，住む家がどうしても見つからぬ。仮住いで我慢を重ねたが，遂に思いあまって，官舎のある営林署長に逆戻りさせてもらいたいと申し出た。そのとき，上司の池田大助さんは，実は浦和市内に官舎に類する住宅の建設計画がある。そこに優先的に入いれるよう取計らってやる。ついては業務課の石谷技官に会って



自宅でくつろぐ石谷夫妻

おくがよかろう，とのことであった。つまり，石谷さんが，その計画の推進者であることがわかった。

かくして最初に建設された数戸の住宅の一つに私も入居することができ，その後，間もなく近隣地に建った住宅に石谷さんも入居された。共に15坪建の家であったが，御殿に住む心地で，安住気分を満喫したものである。

それから，石谷さんとの交際が始まった。石谷さんと私とは，性格に異なる点もあったが，なんとなく話が合い，それに双方共に数人ある子供がそれぞれ年齢が近似していた関係もあって，両家庭は往来頻繁となった。戦後の食糧不足時代とて，買出しの情報交換をしたり，養鶏用のヒナを斡旋したこともあった。

家庭における石谷さんは良き父であり，良き主人であった。そして生活態度はきわめて質素であったようである。奥さんは物静かで，どちらかといえば引込み型の賢妻で，ご主人の積極果敢なのと好対象であるが，まことに夫婦円満で，口論めいたことはついぞ聞いたことがなかった。ご主人は庭掃除が好きであった。これはあるいは運動のためであったかも知れないが，ほとんど毎日のように竹箒で庭や前道路を掃いていた。日曜日等には，よく薪割りをしておられた。これに反して私は亭主関白で，家事にはほとんど無頓着なので，家内から，石谷さんを少しは見習いなさい，としばしばいわれたものである。

ご存じの方もあるかと思うが，故人は日常越中褌を着用していたが，夏季なんかは褌一つの裸体で薪割りのマサカリを振り上げるのである。あるとき，隣家に住む某氏の奥さんが，境界の目かくし板べいの下方から，その光景を見るともなく眺めると，褌のゆるみにも気付かず薪割仕事に熱中する姿に感心すると同時に，丸薪が地上に横たわっておる他にぶら下がっているのも目に映った。そして，やせっぽの自己の主人と思い比べて，大いに意を安んじたという1巻をまた聞きに聞いたことがある。

石谷さんは，クシャミをすることが常人より多い。始めのうちはかぜ気味かと思っていたが，そうでもない。季節を問わず，年中やるのである。しかも，派手にやるので，相当の距離の所まで聞こえてくる。近頃，ある人から聞いたことであるが，日常クシャミを頻発する人は，血圧の高い人にとかく多い。これは，毛細血管の鼻奥部刺激と関連があるのでなかろうか，という説である。一度専門家にこのことを尋ねてみたいと思っている。

石谷さんとは林野庁で，課長の同僚として2年間を過ごしたが，その頃から種々の面において，課長連中のリーダーとして頭角を表わし，すでに今日の大成を窺うに十分であった。その後，私は地方回りに移り，氏は本省の中枢を昇られて，遂に林野庁の最高位に就かれた。

年月は移り，昨年の暮れ近い頃に，久し振りに先生にお会いしたとき，私に対し，いつまで役人をしている所存かと尋ねられた。私は，近く勇退し，静かに余生を過ごしたい旨を答えたところ，先生は，現役を退いてから毎日家でぶらぶらすることは，第一に健康上考えものだ，それに家族の目障りにもなろう，と戒められた。そんなことがきっかけとなって，今春退官と同時に，現在の職にたずさわることになった。思えば，石谷さんには世話になりっぱなしになってしまった。

石谷先生は世話ずきと実行力に富んでいるので，頼まれるままにいろいろな体団の面倒をみておられた。自ら主宰した全国的な団体だけでも日本林業技術協会を始め

4団体があり，その他顧問等の類は多数に及んでいる。主宰団体の1つに私の属する全国公団造林協議会連合会がある。すなわち，森林開発公団の行なう造林事業は，分収造林を立前としているので，土地提供者や事業担当者など，その分収契約の相手方が多数あって，その数は全国で約3千に達している。それら契約者が，共通的利益擁護と公団造林事業の推進に寄与する目的で結成した団体（協議会）が概ね各府県単位に設立しており，その全国連合会が昭和39年夏に設立を見，石谷先生が推されて初代連合会会長に就任して今日に及んだ。

昨年は参議院選挙によるショックのため，しばらく引籠り勝ちであったが，やがて思いを新たにし，特に昭和42年度の公団造林事業の予算要求については，異状の関心を持っていた矢先に不帰の旅路にたってしまわれた。森林開発公団の造林業務は，昭和36年度より実施しているが，41年度までの財源であった国有林野事業特別会計剰余金が同会計の現状よりして，今後は他の出資方式に転換せざるを得ない重要段階に縫着しているのである。そのような時期に，石谷先生の如き偉大な指導者を失ったことは惜しみてもあまりある。

石谷会長は多忙の身であったので，仕事の用事があっても，一つ建物内におりながら，面接の機をつかむのに苦労することがしばしばあった。私は長い役人中を含んで，他人の起案文章や加筆に感心したことがときたまあったが，石谷さんの加筆にはいつも感心した。技術者出身にはめずらしい文才の仁であると思っていたところ，先生の葬儀の際に，その松江旧制高校時代を知る人から，先生は，松江時代に文学書を盛んに渉読していた趣きを聞くに及んで，先生の文章の巧みなことも，むべなるかなと独り合点をした次第である。

石谷先生は性豪毅，闊達であると同時に，実に細心，周到の半面を持ち，その透徹した頭脳と適確な判断力に加えて旺盛な実行力は，他の追従を許さぬものといえよう。私が特に敬服していた点は，人との応対に学歴や経歴による差別的な態度を表わしたり，優越感を誇示することのないことである。先生は小学校より大学まで，制度上可能な最短距離を最短時間に進まれたまれにみる秀才であり，また，実家は名だたる素封家であるが，そんな素振りを少しもしない。人から乞われれば，誰彼の区別なく気軽に，よく人の面倒を見，指導を惜しまなかった。そんな次第であるから，故人のありし日の事務所はもちろん，休日は自宅にまで訪問客が門前市をなした。

しかし，先生も人間であるから，真面目な性格のあまり，打算的なことや，謀略的なことを排し，また，気に入らないことについては，あからさまにそれを指摘することがあるが，時がたてば，ケロットして，後味も残さなかった。

林政多事の折りに，先生の如き大人物は林業界の大御所的存在として，今後の活躍を期待していた者はきわめて多いと思うが，今や幽明その所を異にせられたことは，返えす返えすも惜しい人を失ったものである。　合掌

懐い出すままに

〔参議院議員〕
柴田　栄

昨今のできごとで石谷君の急逝ほど私を驚かせたことは近来にない。

選挙以来，石谷君のことを思い，身心の痛手を癒しつつなるべく早く立ち直ってもらうためにそっとしておいてあげるのが一番だと考えて積極的にお会いするのを遠慮していたほどなので，最近の石谷君の近況は詳しくは知らずにいた。しかし8月の中頃，若林長官のお招きで前の長官達を集めていただい時に君も出席されて久し振りにお目にかかったが，その時には大変明朗な君に会い元気そうであったので，正直に私は大変安心した感じでした。唯その時に何時も太った君を見つけている私には少し痩せてかえって健康そうになられたと喜こんだほどでした。私が北海道の会議の席上で突然に君の逝去の報を受けて，どうしても本当とは信じられなく，再度確認をしていただき，相違ないと知っていまさらのように驚ろき，だんだんに悲しみの情がこみ上げて，会議もうわの空というありさまになってしまった。

石谷君の思い出を何か綴れとのお話しだが，何から書いてよいやら手が付かないというのが実感です。

石谷君と初めて出会ったのは君が昭和6年に秋田営林局へ来られた時で，その当時秋田の営林局には悪童どもが集まって，飲んだり，語ったり，暴れたりする杉の木会というのがあった。年齢的には最も若い学士であったが，堂々たる態度で，来て早くから仲間の中心となり，若い局員の指導的役割が身に付いていたような気がする。

当時君も私も秋田営林局の計画課にいて，施業案の編成業務に従事していた。その主宰者が，私達の将来を性

格付けるような大きな影響を与えてくれた先輩，岩崎準次郎様である。

私が岩崎様の厳しい訓育を受け，2年余にわたって常に，公私におよぶ指導を受け，人間の修業をさせていただいたが，このことは私の性格上の欠点に常時大きな反省の資となっていることを思い出すたびに感謝で一杯であるが，私が営林署長として岩崎様の膝下を離れて以来引き続いて岩崎様の身辺のお世話をしてくれたのが，石谷君でした。私にとっては君は同じ父の下で育った兄弟のような気がしてならぬ。

不思議な因縁の糸につながり，爾来，いろいろの経緯は異なっても常に同じような経路につながっている。

君は同じく営林署長となって独自の活躍を始めて間もなく，戦争に入り応召されて一兵卒として出征した。私は銃後にあって戦争の営みに参加をした，その間生活は環境を異にした。しかしその間常に中心になって活躍せられたようである。

マラヤ従軍における石谷君の実力はゴボー剣の石谷が木材班として総軍に鳴り響き，内地木材業界にまでその実力を高く評価せられたことでも明らかである。マラヤの植物誌のごとき物を調査された林業に対する情熱は軍務多忙の間に君の心情察するにあまりあるものと当時感激した一人である。

終戦後は捕虜としての苦しみまで経験してなお悠々たる心境が帰還以来の活躍に一層の力強い原動力となったものと思われる。

経済安定本部の林産課長として出て他流試合に勇名を馳せたのも君の実力であった。

私が田舎回りをしている間本庁にいて常に中心となり林野の推進に当たってこられたことは衆知のことである。そして私が林野へ帰えってから直接私を助けてくれて国有林の経営の中心になってくれましたので私は一切を任せて何の心配も不安もなく林野運営の一翼に参加できたのである。

そして業務部長として当時の大事件である北海道の未曾有の大風害の処理に当たりみごとな計画と指揮振りは内外の評価を高からしめ，いよいよ真価を認められて，長官就任の際には，世間が一致して君を推すという結果になったのである。

長官時代の事跡は林政の根幹を確立し，国有林経営の大方針を樹立し，歴代長官中出色の人として政界にまで大きな信頼を得た代表的な人となりました。

政界に身を投じて以来も全国林材業界の代表として大きなる跡を残し，また中央林業相談所として諸般の林材界の具体的問題に数々の実績を挙げ，いよいよ政治力にも磨きがかかり，参議院地方行政常任委員長として重きをなしてまいりました。

第二期の参議院選挙にも全国林材業界の興望を担って出馬致しましたが，後援団体の楽観ムードが不測の結果を生じ，死期を早めた遠因ともなりましたことは誠に如何に惜しみてもあまりあるところであり，心残りでなりません。

生まれつき人の先に立ち，人を引きつけ，指導する位置にあるような資質を持ったまれにみる人材でした。私は幸いなことに君の先輩に生まれ，終始同じ道を歩み，常に私の後の仕事を受け継いでくれまして，ある時は私の手をつけた仕事の締めくくりをしてくれ，ある時は私どもの仕組んだ仕事の実行に情熱を打ち込んで思いがけぬ苦労をしてくれたり，私の選挙のたびごとに親身もおよばぬ心配をしてくれたり，私個人として君ほど厄介になった人はありません。それにもかかわらず，いっこうに報いる何物もなかった自分をいまさら，くやんでいるものです。

思い出すままに書き始めたものの，あまりに多くのことが思い出されてまったくまとまりません。今後また時にふれて思い出を語る時もございましょう。

石谷さんを惜しんで

〔参議院議員〕
山崎　斉

A．北海道の日高郡静内町にある営林署で夕方林業界の方々と懇談の最中に，札幌からの電話で，石谷さんご逝去の旨を知らされました。集まっておる者だれひとりとして，しばらく声も出ず，その真疑にとまどう顔ばかりでした。その夜，浦河町の海辺の旅館に泊って，復員後駒込林町の寮での六畳間に一年に及ぶ乏しい共同生活，北海道風倒木処理等々忘れ得ない思い出の数々が止まる所なく頭に浮かびました。特に「昨年7月の選挙における大きなショックがかかる事態の基本的誘因となったに違いない」と考えて寝つかれない夜を過しました。

昨年10月の国勢調査の結果によれば，山村地域人口は全国的に見ても，5カ年間に，20～25%の減少を見ておりますが，選挙前におきましても「数字的には明確では

ないにしても，山村人口が地こり的な減少をきたしている」ということは皆が承知していたことです。例を木炭生産にとっても，製炭者(農閑期の製炭者を含む)は数年前には19万世帯といわれたものが，最近は5～6万世帯に減少，わが陣営の選挙にはきわめて不利な環境にあるとは考えておりました。中央の私達もかかる状勢がいかに影響するかにつき心配もし，地方の主な方々とも相談しましたが，一様に「影響はあるだろう」という認識には立ちながらも，それでは「どの程度か，対策は」という最も重要な点では確たる具体案を持ち得なかったことが誠に残念な結果を招来したものと強く反省されます。結局中央における私達に見通しの甘さがあったことを痛感し，誠に申し訳ないと反省と悔悟を深くいたします。

それにしても，石谷さんには，昨年は見た目にも疲労感が感ぜられましたが，本年に入るに従い元気を回復され，亡くなる1カ月位前に，若林長官の前，元長官招待会では，大変元気で快活になられた姿に接したばかりでしたのに。

B．林野庁の役人として，特に戦後は最高幹部としてのいろいろのことについては，それぞれ先輩，同僚，後輩の方々からの発表があるかと思いますので，私は参議院生活6年間における同氏の活躍の姿を見ての追憶を書いてみたいと思います。

まず第一に，同氏の頭の中には，わが国の林政の正しい発展，林野庁のより良い行政，施策の実施とひいてはその組織の安定，強化への熱情が，現役時代と少しも変わることなく満ち溢れていたことを痛感し，心から敬服いたします。委員会や自民党政調の活動を通じただ一筋に，これにまい進したといっても過言ではないと思います。現役の者に，必ずしも甘くない苦言も呈し，政策についての批判もし，誤解を招くこともなくはなかったと思いますが，林政を林野の前途を思う真情の発露であったとしみじみ考えさせられます。

第二には，最近の政治の姿勢に対し，同氏がどんな考え方，見方をしておられたか，実は聞く機会をなくして誠に残念至極です。私も委員会開会の都度，共和製糖，バナナ輸入等いわゆる黒い霧の問題審議にのみ忙殺され時には国有林交換問題が織り込まれて，まことに不愉快な状態に置かれております。潔癖で理論的な同氏が，このような政界の姿に対し，転換し，正すべき方向につき明快な考え方を必ずや見い出してくれるはずであったと心から偲ばれます。

第三には現在直面し解決がはからるべき林政の方向につき，卒直な意見と指導とを失ったことが残念でなりません。自民党も政府も，未曽有の重大転機にある林政の方面づけに懸命の努力を払っております。しかし何といっても，力強い，信念と洞察力のある同氏が欠けたことは私達にとって一大不幸であって，政調における審議に際し，また業界に対しての指導の面で，迫力に一段の衰退を感じさせます。以上思い出し，また，感ずるままにいろいろと書きましたが，石谷さんのご冥福を心から祈りながら筆をおきます。

石谷さんの話っぷり

〔宇都宮大学教授〕
大　崎　六　郎

石谷さんが急逝された。まことにりっぱなお方だったと思う。私は末輩であり，職域も異なるのであまりその偉容に接した人々の部類にははいらない。それでも私のメモを繰ってみると，身近かでしかも公けの機会で石谷さんの話しっぷりに打たれたことが3回ほどある。

はじめは昭和27年5月10日に仙台でお目にかかっている。宮城県の民有林施業計画編成5カ年事業完成大会のときである。石谷さんは林野庁計画課長であったかそれとも業務部長になりたてのときだったか，その点は私の記憶はあいまいである。とにかく石谷さんと私とが記念講演の講師ということでごいっしょした。石谷さんはハリのある声量でしかも自信に満ちて民有林行政のあるべき方向を説かれた。私はそのときは「育林業の利回りについて」乏しい材料をもとに話をしたように思う。同夜は同じ宿舎にご厄介になったが，12時近くまで私にいろいろと話しかけて下さった。とくにこんごの林政の方向は経済に重点をおくようになるべきだと強調し，昼間の私の講演内容についても感想を述べて，――ドロ臭い点が持ち味だ――と言って下さったことを覚えている。当時石谷さんは45歳ぐらいだったはずであるし，私も40歳だったことになる。

その次に記したいことは昭和38年7月17日にまで飛ぶ。栃木県鬼怒川公会堂で全苗連の第17回関東ブロック大会のときである。私は来賓ということで招待をうけた立場であったが，感想を書いてほしいということになってしまった。その原稿が同年8月25日付全苗連時報第143号に載った。題して「二つの印象」というのである

が，大体において(1)議題について(2)あいさつと祝辞についてクサしている。

ところがそのなかに私は次のように書いている。――議案内容を綿密にメモしていたのは石谷会長だけだったかも知れない。議長にうながされて石谷会長は七つの議題のそれぞれについて，全苗連としての立場を説明した。私はこの説明内容が大会での最も「聞きどころ」だったと思う。もし石谷会長が欠席していたら，私はこの大会ではほとんど勉強するものを得られなかったような気がする。――と評してある。

最後にもう一回は昨年5月22日の山形市での山形県森林組合振興大会のときである。私はその記念講演に「林業構造改善のすじみち」ということで話をした。それに先だって石谷さんの国会報告がおこなわれた。およそ国会報告というものには――ワタシが……をした――という意味合いのことがらが多いものであるが，石谷さんのお話のなかにはそれが出てこない。林業の現状を心配しての立場が一貫していた。石谷さんのお人柄がうかがわれた。私の話も終始聞いていて下さったが，帰りの自動車のなかで「君もますます元気で結構だね」とおっしゃって下さった。

石谷さんの魅力のある話しっぷりには，もう永久に接することができない。まことに淋しく悲しいことである。

故石谷会長を偲んで

〔全国木炭協会常務〕
重　元　　巖

全国木炭協会が三浦辰雄氏を会長として発足したのは昭和28年1月17日であった。昭和15年以来続けられてきた木炭の価格ならびに配給に関する一切の統制は昭和25年廃止せられ，戦後の新たな経済政策の中において木炭業界は新発足することとなったのであった。

この木炭統制の廃止は従来とられてきた国の保護施策を弱めることとなり，進展する経済情勢の煽りは木炭業界はきわめて困難な状態に追いこまれたのであるが，当時の業界は一致団結して木炭の山村経済に占める重要な基盤および国民生活に及ぼす重要性を強調し，政府に対し強力な木炭対策の推進を要望したのであった。

三浦会長を中心とする全国木炭協会のこの運動も，当時の政治情勢下においては予算獲得も思うに任せず，これがため業界は困難な途を歩んできたのであるが，これに屈せず，業界の総意を結集して政治運動を展開した結果と当時林野庁長官としての石谷氏のなみなみならぬ努力とが相まって，昭和33年度にはじめて木炭生産指導費として301,244千円が予算に計上され，ここに木炭対策はその足掛りを得ることに成功したのであった。

このようにして木炭政策も国会における認識の深まるにつれ，徐々に強化されてきたのであるが，一方わが国経済の驚異的進展の中において，農山村経済の立遅れと生産事情の悪化，ならびに燃料需要構造の変化により木炭業界はかつてみない困難に追いこまれたのであるが，この時期に当面した昭和36年5月12日，三浦会長の後を継ぎ，石谷憲男氏が会長に就任したのであった。

石谷氏は会長就任以来，参議院議員として林材業界の期待を一身に集めて多忙な活動を続ける中においても，わが国の山村経済を建て直すことを重点として，その中において木炭業界のあるべき姿を打ち立てる構想をもって極力木炭政策の推進を図って来られたのであった。

石谷会長のこの努力はきわめて地味な動きであったかも知れない。しかし，具体的には木炭生産および流通近代化に向かっての新規予算の獲得等の成果によっても判断し得るように，奥地林業の発展による国土の高度利用と山村経済をいかに結びつけるか，そしてその間において木炭生産をいかに進めるか新しい構想をもって終始されたことが窺われるのである。

石谷会長のこの理想は昭和39年に成立した画期的ともいうべき「林業基本法」の中にもいきいきと表われてきているように思われる。同法の成立が危まれたとき，石谷氏は参議院地方行政委員長の重責にあり，直接林業基本法の審議には参画しなかった。しかし，自由民主党と林野庁との連携，国会内の審議進行の要請等陰の大きな力となっておられた。さらに最終的には社会党等野党の議員に対しても林業の重要性を説き，同法成立に協力せしめるなどの努力を行なっておられた。われわれ，その間の消息を知るものとしては，林業基本法が奇蹟ともみられる国会最終日に成立したことについては，石谷氏のかくれた努力があったことを見逃すことはできないのである。

そのほか，石谷会長が木炭業界の先頭に立って，困難な業界の基盤の確立と経済性の自立のため努力されてきたことに対しては頭の下がる思いがする。ご承知のように林材界においても木炭生産者は組織も弱く，経済的には全く取り残されたともいえる山村の大衆である。この

業界を現在の社会情勢の中で救済する途は保護助長政策以外にはない，これが石谷会長の固い信念であったように思える。そして石谷会長がこの信念に立ち，しかも持前の熱意と迫力ある説得によって，政界の認識を深めたことが，今日の木炭業界の支柱となってきていることをわれわれは感謝せねばならない。

この名会長をわれわれは突然失った。予期もせぬことであり，業界も戸惑ったというのが真実である。しかも木炭業界の当面する問題は今後ますます嶮しいものとなるであろう。われわれは生前に示された石谷会長の指導理念を鑑とし，今後さらに業界の結束を固め，あらゆる障害を乗り越えていきたいと思う。そしてこれを実現することが，お酬いできなかった故会長に対する唯一のお詫びの方法だと考える次第である。

石谷さんと私

〔全苗連副会長〕
山本　晃

尊敬する石谷先生の，突然の悲報を受けたのが，伊豆下田の宿であった。

あれほど健康でからだに自信のあった先生が，この世を去られるとは，あまりにも夢の様であり，わが耳を疑った。

当時は，全苗連静岡大会終了の翌日であり，会長である先生は，最高責任者としてご出席いただく予定であったが，16日夜軽い発作があったとのことで，大事をとっていただくために大会もご欠席いただき急拠，各副会長で分担を決めて無事，盛大裡に大会を終了することができた。気にかけておられた大会の様子の報告や，病状の経過を聴くために浦和のお宅に，電話で連絡申し上げたところ奥様から，病状も軽く医師の診断では，2，3日安静にしておれば快くなられるとのことで，やや安心して1日も早く全快されることを心から祈っていた。

発病される10日前，石谷先生とともに名古屋，長野各営林局へ陳情に行き，3日ほど一緒に行動をさせていただいた帰途，軽井沢の初秋の高原を歩いて全苗連の今後や，当面の諸問題等に対して先生の，高邁なご意志を聴いて教えを受けたのが，今から思えば日頃の先生を知る私としては，何か虫が知らせるとでも言うのか，心に通じるものがあり，いまさらながら思えてならない。車中話の尽きないまま，大宮駅で名残り惜しく先生と，静岡の全苗連大会での再会を約し，郷土の様子を聞くのを楽しみにと，手を振り合って別れたこの時が，永遠の別れになろうとは神より知るよしもなく，世のはかなさをしみじみと感じた。有りし日の先生のお姿が髣髴として瞼に浮かび，今でも時おり先生のお声を耳にする錯覚さえおぼえ，涙を禁じ得ないものがある。

林政の石谷と言われるほどの先生は実によく，北へ南へと動かれ，先生をお慕いする人は数限りとなく，真から皆の面倒をあれほど見られた人は少ないと思う。その大先生がどこで，まちがったのか世の中がくるっているのか，痛恨の昨年7月4日参議院戦を境にして，人生が一変してしまわれたのである。どうにもならない結果を見て，7月6日傷心の同志と空路東京へ飛び，浦和のお宅へ郷土を代表してお詫びにお伺いして，悲壮な先生のお姿に接し慰めの言葉もなく，あれほど人を信じ，人を愛した先生としてはあまりにも痛々しく，打ちのめされた感じに早く元気になって下さいと，ただ言うだけでともに泣き，2度と先生にこんなお姿をおさせしまいと心に誓い，鳥取県に帰って巻土重来を期していただくために，努力を続けて来たがその中途で，帰らぬ旅路につかれるとはかえすがえすも残念でならない。

今から思えば，前回の衆議院選終了直後であった。数人の有志と集い，先生の次期はどうされるのか，心境をお伺いし，お願いもして先輩諸先生の例もあり，地方のコースで再出馬をしていただくことを懇請し，有志で積極的に目標に向かって進んでいったが，郷土鳥取にも，内部事情もあってなかなか思うようにはゆかなかった。しかし努力を続けているうちに，先生のご人徳の結果が徐徐に実って好転し，某有力県議の力添えもうることができた。過去幾度か保守政党の敗退も必勝を期するには，石谷以外にないとまでムードが高まり，全県挙げて支援の体制が打ち出された時は，身のひきしまる思いに嬉しさが一ぱいであった。かくのごとき情況にもかかわらず全国区に進まれることに決したことは，意外と言うより解せぬことであった。

先生のお人柄とて全国区であろうが，地方区であろうが，議席を得られたらなんらの差別もなく，大極に立って仕事をされたであろうと思うと，あまりにも周囲が考え過ぎて，安全な道を選ばせなかったことになるのではなかろうか。

参議院戦終了後は，心の痛手もようやく癒えて，全苗連等も従来通り意欲をもって，積極的に面倒を見ていた

だき，石谷健在の声が聞かれるようになった。郷土へもつとめて帰郷され，そのつど集まる各界各層の人の数もふえて，石谷先生の人間性に魅力を感じていたようである。また先生は人の話など実によく飽きもされず，聞かれたものだと思うことがしばしばであった。

時には私の浅津温泉の湖畔のささやかな別宅がとてもお好きで，ご帰郷の際には必ずお泊りいただいたものだが，この家が一番よく休めると言われながら，夜の2時，3時頃まで昔の思い出話等，お話は尽きず，私ども夜遅くまで聞いたものであった。林政の諸問題，特に国有林の重大時期を強調され，百年の悔を残さぬよう心配されておられたようだ。

先生は体に似ず情のきわめて細やかな面があり，温情家であった。浦和のお宅よりたびたびお電話をいただいたが，いつも必ず体に気をつけるよう，家内の健康を心配して下さった先生が，どうしてご自身の体調に気がつかれなかったのであろうか。宿命とでも言うかあの時の瞬間が，人生の分岐点となったようで悔いられてならない。

しかし，先生のご遺徳は未来永劫，ついえることなく，先生の生地鳥取県智頭町の森にかこまれた，町の一角で静かにわれわれの行く手を，見守って下さるにちがいない。

鳥取県の林業と石谷先生

〔鳥取県農林部次長〕
光本政光

石谷先生が中央政界，林業界においてご活躍になられたことは関係者一同の知るところですが，先生はまた，わが鳥取県山村の柱石でもありました。戦後の絶え間なく移り変わるむずかしい林業情勢の中にあって絶えず大所高所から，あるいは実質的一県民の考えに立って郷土の発展のためのご指導とご尽力を賜わりそのご功績は数えきれない位，大なるものがあります。

むずかしさで知られている本県の林材界の指導についても，戦後地区木連より県林材協会への統合運営さらに県木連への飛躍的発展などその行動的果敢な指導力は高く評価されなければならないものであり，また先生の人徳の賜と考えるものであります。本県の県史に永遠に残

植樹祭にて

る第16回植樹祭の誘致を始めとし，待望久しかった林業試験場の新設，林木育種場山陰支場の誘致や，全苗連大会の開催などあるいはまた，たび重なる災害の復旧事業や，未開発奥地林の林道開設など県民にぜひ必要な欠かせない林業施策，事業についてもそのほとんどが先生のご指導とご尽力を得なかったものはないほどであり，林業関係者はもちろん，関係地区民心を一にして信頼し，尊敬感謝し，郷土鳥取県の発展に努めてきたもので，先生がお亡くなりになって，なお一層先生の偉大さを痛感しているのであります。

このように一筋に林業にその生涯を捧げ努められた石谷先生は，有名林業地智頭町にお生まれになり，山林家で杉神社創設者で有名な故米井信次郎氏を叔父に持ち，実父の永蔵氏も人格尊厳にして格別な造林家であり，その志を受継がれ，林業人としての完成された先生が生まれられたことと思います。先生は日頃剛胆誠実，清浄潔白な人柄でしかも行動的果敢な性格の反面社交辞令はお世辞にも上手とは言えず，したがって，ズケズケと発言し即戦即決型のようでして，できぬことはできぬとはっきりと申され，その陰で一生懸命に熱心にあらゆる努力をおしまぬ型の人であったと深く印象に残るものであります。また，林業を離れた一個人としての先生は，部下や郷土人の世話や面倒を終始いつまでも変わらずみていただき，その信望は絶大なものがありました。

このように誠実で人情味に厚く，しかも近世まれにみる「林政通」として大指導者を失ったことは，国はもちろん，本県林業のためにも，この上ない損失であり県民等しく惜みてあまりあるものがあります。

今後は先生のご意志をいささかでも継承して，本県林業発展のために努めることが，先生の霊をお慰めする唯一の途であろうかと信じ，努力してゆきたいと思っています。

追　悼　の　記

〔東京営林局監査課長〕
公　平　秀　蔵

先生と，私の初の出会いは，戦後間もない，昭和22年の秋，私が地方勤務から再び林野庁に戻って来た時でした。当時，先生は，木材課で，輸送と貿易部門を担当していたが，もう数日のうちに，郷里の鳥取営林署長として赴任することが決定していた9月末でした。私が寒河江営林署から本庁に戻ることが決定した時に，先輩の寺門署長から，木材課には，石谷憲男という人がいるがなかなかの傑物だよ，秋田の局で一緒だったんだ，きみが行って見たらわかるよ，とのことを聞いたのが，先生に対する評価を耳にした最初のものでした。鳥取へ赴任する石谷さんと，須崎に赴任する山崎さんとの送別会の席で，私は，黙って盃を交した時の印象が，今でも，はっきりと残っているのです。10月早々，お二人は，都落ちをされたのである。たしか翌23年の10月だったと思いますが，当時，経済安定本部の林産課長であった，小滝さんから，ぼくは，近いうちに，北海道に転任するが，後任として，鳥取から，石谷君を持って来るつもりだと聞かされた時に，私は，役人でありながら，業界団体の役員にまで容喙したことがあると聞いているが，優秀な人であると，聞かされているけれども，大丈夫ですかと，反問して，「君は，なにも知らないんだ，君も，もうそろそろおとなしくなってもいい頃だぞ，石谷以外には，安本の林産課長を直ぐやれる者は，いないんだ，なあ君，俺は，石谷の露払いをするんだ，そして山崎君が，後をしめくくるんだ，見ていろ，そのうちに，そんな恰好が現われるぞ」と，小滝さんから，お叱りを受けたこともあったのです。

こんなことがあってから1カ月程で，小滝さんは，当時の，田中知事のブレーンとして，北海道に赴任し，後任として，石谷さんが，中央に復帰されたのです。そしてまた，1年半後，奇しくも，石谷さんから，当時の私の課長であった，先日急逝された田中紀夫さんに，話があり，私の，北海道赴任が決定したのでした。

私は，かねてから，小滝さんのような，感覚の持主に，一度，使われて見たい希望を持っていた矢先でもあり，小滝さんの，北海道での，特別の立場から，小滝さんの手足となって，使い走りする人を必要とするということで，田中課長に対し，私の割愛方を，丁重に，懇請されたのが，石谷さんだったのだと，田中課長に聞かされた私は，「己を知る者の為に」の気持となって，25年6月，勇躍，北海道に赴任したのでした。その時以来，私のような者を丁重に扱ってくれた，石谷さんに，心から，尊敬の念を持つようになり，終生，師事し，万事指導を仰ぎ，仕える決心を持つようになったのです。

田中知事再選の前後の準備と，跡始末の期間を通じて，先生に接触する機会がより多くなり，私は，ますます先生に対して，畏敬の念を持つようになり，先生もまた，私に対する理解の度を深められたのである。

青森の菊地老，金沢の通善老，木場の武市老等，業界の大先達に対する態度，上司や部下，同級生や後輩等，頼ってくるすべての方々に対する先生の態度には，情感あふるるものがあったのです。先生は，知よりも，理よりも，情で代表される方でした。英知をもちながらも，理もまた，人より多く持ち併せながらも，先生の意志，判断，言動を決定するものは，情であったことを，私は，傍で数多くの事例として見ることができました。まことに，情の人でした。このことが，時には，人に悪用されることもあり，他人に対する，配慮過剰と見られることなどもあって，誤解を招くことも事実でした。しかし，苦難に直面し，迷い，そして打ちのめされた時に，先生を訪れて，苦難に打ち克つ力を与えられ，明確な判断を下してもらい，さらに明日への勇気を与えられた人は少なくないはずです。私もその中の一人である。三浦先生，横川先生，柴田先生らの参院選，先生自身の長官への栄進，山崎長官の出現と先生自らの参院選出馬，そして昨年の惜敗と，流れ去った15年の間，私，自ら求めて先生に接し，先生の英知の温情と，日々充実した人生感を吸収するに懸命だったのでした。この間数多くの教えを受けることができました。「師に迷惑をかけてはならない。」これが，私の日常生活の規範であったのです。今，私は，その最大の師を，この世から，失った。15年の間に，諸々のできごとを通じて，現実の行動で，先生に教えられたことを，日に一度は思い出すことによって，自らの規範喪失の防止に努めているのです。

先生は，私の心の中に，今日も生きている。

写真の先生

〔林野庁林政課〕
八木下　弘

「あんた石谷先生から写真を教わったんだって?!」

築地本願寺の一隅で，竹内(タケヘイ)ジャーナルこと，秋田の林済ジャーナル主幹の竹内氏がそっとわたしにささやいた。

地元の秋田はもちろんのこと，全国林済界をところ狭しとばかり駆け回る彼にしては，ちとお粗末な言葉だと，心中ニヤリとしたが，「そうですよ。」と軽く答えた。竹平氏ばかりでなく，なにか話のついでに，「あなたの写真の先生は石谷先生だそうですね。」とよく半信半疑の質問をうけたものだった。そしてこのことは林業界では相当ひろく知れ渡っていたようでもある。

事実，石谷さんは，「この男にはわたしが写真の手ほどきをしたんだ。」と初対面の人びとにわたしを紹介したものだった。長官をやめられた直後のある夜，「石谷さんは在職中，なにをやり，なにを残しましたか？」と失礼な質問を発すると，「馬鹿をいえ，俺は情操家の森田。（森田進氏）学者の大内。（現林試大内晃氏）それに写真家のお前を育てたではないか！」と即座に大目玉をむいて，アッハッハッと笑った。明けても暮れても林業界のことに専念し，心の休まることのなかった石谷さんには，時おり，話題のはしにわたしのことなどをのせて，いっときの気休めにしていたのかも知れない。

昭和13年，わたしは秋田の農学校を出て幸いにも営林局に奉職することができた。3カ月ばかり秋田営林署の男鹿山国有林の斫伐事業所で検尺などをやっているうち，営林局に呼ばれ，早速，西馬音内(ニシボナイ)事業区の施業案の検定にやらされた。検定を終えて帰局すると，今度はまた係が変わった。「スギ林基礎調査係」いがぐり頭で，顔も体も丸まると，全身これエネルギーのかたまりのような人が新しいわたしの主査だった。検定のときの主査が，温厚で貴公子のような人（故三上氏・戦死）だっただけに，この新しい主査の石谷さんのそばでは，寸時の油断もならないという雰囲気がただよっていた。係員の先輩には村上源太郎（現秋田局）安原直人（不明）古家儀八郎氏（植物分類学の大家，故人）などがおり，かげでは，「親方」とか「タンク」などと呼んで大いに恐れられ親しまれていた。そんな中へまだ東西もさだかでないようなわたしが飛び込んだのだからたまらない。〝若いもんは，しぼるに限る〟という主査殿のモットウのもとに，くる日もくる日も，直立不動の姿勢でいろいろ教育される羽目とはなった。

なんとか年も越えて翌年のある夏の午後「八木下君！」岩崎計画課長（故岩崎準次郎氏）の室から戻ってきた主査殿は，机に坐わるやいなや，例の威勢のいい声でわたしを呼んだ。今日は朝から計画課長室に入ったきりで，タンク殿の机は空席だったので，裏門側の二階にあるわが部屋は珍しく，先輩たちの冗談の花が咲いていたのだったが，この鶴ならぬ虎の一声に，さっと緊張の空気が流れた。これからかれが得意の日課が始まるのである。トップバッターのわたしは，バネ仕掛けの人形よろしく立ち上がった。前の席の女の子が，ちら，とわたしを見た。その眼には，〝気の毒に〟という表情がこめられていた。わたしの郷里は秋田から北へ汽車で1時間ばかりの五城目町というところであるが，この女の子も同郷だった。なにしろ女学校を卒業してこの四月，運悪くもわが係に職を奉ずるようになって以来，毎日，判でおしたように，約2時間はホルモンタンク殿の前で，直立不動でふるえているわたしを見るにおよび，「八木下さんは，きのうも叱かられた，きょうも叱かられた，あしたも叱かられるだろう。」と家に帰って家人に報告に及んだからたまらない。たちまち，その話は小さい町中にひろがって大いに面目を失ってしまったのであった。タンク殿は，「俺がもんくをいわなくなったら終りだと思え。」と常日頃のたまわっておられたが，「女子と小人はやしない難し」と古語にもあるように，このうら若き美女も，わたしたちの人間関係を見通すことはできず，ただひたすら，虎の前にふるえる1匹の仔羊としか見ることができなかったのであろう。

その仔羊が，姿勢をただして，タンク殿の前に立った。ギョロリと大きな目玉が上を向いた。

「君は写真を撮ることができるかい？」

「はっ？」地方の農学校，しかも戦時中とあり，もっぱら食糧増産の一翼をになって，肥え桶かつぎが専門の如き観のあったわたしであり，さらでだに，写真などというものは，一部の人だけに限られたお道楽で，遠くうかがい知ることのできない存在だったのである。

仔羊の全身から冷たい汗が流れていった。思いもかけないタンク殿の質問に，気はすっかり動転していた。ただ，「はっ，はっ」と答えるばかり，ようやく気をとり戻して，「写真は全然わかりません。」と答えると，また

ギョロリと目玉がうごいた。

「俺のところにきて，写真の写しようもわからないとはどないしたことだ君！　俺が教えてやるから，写真機を早くもってこい。」部屋中にピリピリッと鳴り響いて巨大な雷が落ちた。それを機にわたしは正確にまわれ右をして，かぎのかかっている木製の書箱から，おそるおそる写真機をとりだした。写真機といっても，現在のような精巧小型のものではない。手札判のガラスの乾板を使用するハンドカメラである。テッサーレンズとコンパーシャッターのついたドイツ製のカメラで，岩崎計画課長が欧州に遊んだ折，見染めたといういわくつきのマキシマというカメラであった。

タンク殿は机の上に運ばれた写真機をなでまわすようにしながら，操作について一通りの説明をしたあと，「天気がよかったら絞り11，シャッター１秒。曇ったら，絞りを９，シャッター１秒。さあ，わかったろう，わかったら，明日羽根事業区へ行って，スギの稚樹と，スギの林相を撮ってこい！」とど鳴るように出張命令を下した。わたしは進退きわまった。ひととおりの説明を聞いただけで，今だかつて夢にも思ったことのない写真を撮ることにはどおしても自信がもてなかったからである。だが命令は絶対である。ここでちゅうちょしようものなら，原爆さえも落ちかねない。（もっともその頃はまだなかったが）わたしはいさぎよく，（内心はビクビクしながら）とにかく命令に服従することにした。

さいわいにして，この春，東大の林科を出て，同じ係に入った大内晃氏は，その頃すでにライカを持ち写真のベテランであったから，その夜は大内さんの下宿に押しかけ，詳細に手ほどきをしてもらい，翌日は写真機と三脚を肩に，七座営林署の羽根山沢へ一人でトボトボと登っていった。天気は上々，スギの美林は今と違い，うっそうといたる所に繁っていた。わたしはまず林内に踏み入って，スギの稚樹をさがした。それはたやすく発見できた。スギ林基礎調査係りというのは，スギ天然生林の択伐更新法をたしかめる調査を行なっていた。日本に何台もないという日射計や，はては地中寒暖計を現地の林にもち込んで，日照量，地中温度をはかり，さらに植物調査，土壌調査などのあらゆる調査を通じて，スギ天然生林の択伐更新の最良条件を発見しようとしていたのである。だからわたしたちが調査のため森林に入ると，まず稚樹の有無をたしかめるのがいちばん先だった。わたしもここ１年足らずのうちに，スギ稚樹の発見はひとかどのベテランになっていたから，なんの雑作もないことだった。

きのう，タンク殿から教わったごとくに，三脚を据え，写真機をとりつけた。レンズを開放にし，タイムをセットして冠布をかむり，焦点調節ノップを回してピントグラスを見た。

「おう！　見える，見える!!」

わたしは一人で快さいを叫んだ。とろりと光る「ヒメアオキ」の葉の下に，３年生の稚樹が，けなげにも，すっきりと立っている。もっともピントグラス上の像はさかさまなのだが。

命令の如くに，絞りを11にしてシャッター１秒。〝シャーアッ〟とコンパーシャッターはまことに快音をたてた。まずは一ちょう上がり，こんどは上部の林相を撮ればわが任務はおわりだ。なあんだ，写真を写すなどということはわけのないことだ，きのう，タンク殿の前で冷汗を流すのではなかったなどと，ええ気持になりながら，再びピントグラスをのぞき，〝シャーアッ〟と空シャッターを切って見た。その１秒の瞬間，はっとわたしの心にひっかかったものがあった。天気はあくまで晴朗，だが風があった。地上はそれ程でもなかったが，上空は相当の風速と見え，ゴォーッという音とともに，30数米の巨木の梢は右に左に大揺れにゆれているのだ。これにはさき程の口笛でも吹きたいような気持ちはけし飛んでしまった。いくら写真に素人のわたしでも，左右に大きく揺れる梢を見ては，１秒という長いシャッターを切る気にはなれなかった。

二重にも三重にもぶれた写真ができることを恐れたからである。そんな写真をつくろうものなら……あわれな仔羊は慄然とした。「写すべきか，写さざるべきか」心は乱れに乱れ，迷いに迷よった。だがわたしも日頃タンク殿に鍛えられた強心臓を発揮することに決した。すなわち，日はまだ高い，夕方になったら，風もおさまるのではないか。それまでは，久方ぶりにタンク殿の目を離れてゆっくり昼寝でもするか。かくてわたしは，２，３百年にわたって地上に堆積されたフームスの上に，なごよかな夢の一刻を結ぶことになった。

亀さんと競争した兎君よろしく，夏眠をむさぼっていたが，どの位ときが経ったのだろうか，ふと眼をさますと夏の日もいつか西に傾いて，目の前のスギの巨木の幹も，ずっと遠くの幹にも柔かな斜陽が，あかあかと輝やいているではないか。しまった!!　寝過ぎた兎の心境もこうであったに違いない。夢中になって再びピントグラスをのぞいた。だが，無情にも上空を吹く風はいささかもおとろえてはいない。万事休す。このまま帰っては，タンク殿の……。そして，「八木下さんは出張したけれども写真が撮れなくて，目玉の飛び出す程おこられた。」といいふらすであろう女の子のことなどが，頭の中をか

けめぐった。

混乱する頭をしずめながら，なかば茫然と梢の左右に揺れるのを眺めているうち，ふと，しめたっ！　と思った。〝ゴオーッ〟という風の音とともに右から左へ大きくかしいだ梢は，右へ戻ろうとする一瞬，わずかではあるが静止するように見えたからである。これだっ，鬼の首でもとったような気持になったわたしは，この瞬間を狙って，たてつづけに2，3枚シャッターを切り，暮れかけた山を意気揚々と引きあげた。

数日して手札判の密着写真がＤＰ屋から届いた。首をちょっと左にかしげた，スギの林相がそれでも鮮明に写っている。早速その写真をもってタンク殿に復命すると。〝ニヤリッ〟と笑って，「どうだっ，俺のいう通りにやれば，写真もうつるだろう!!」

かくして農学校出の肥え桶氏は写真の道に第一歩を印することになったのである。思えば，わたしもこの日がなければ，今日，別の道を歩んでいたかも知れないのである。まことにわたしの一生を大きく変えたできごとであった。

それ以来，石谷さんは，ことあるごとに，「八木下には俺が写真を教えたのだ……」と。

昭和38年の１月に，「森林写真必携」を発刊するにあたり，序文をお願いに参上するとこころよく承知されて，早速書いて下さった。

「八木下君が学業をおえて，最初に入って来たのが秋田営林局の調査課で，私は其の頃，暫らくの間ではあったが，彼と机を並べて仕事をしたことがある。もうかれこれ25年も前のことになるのだが，当時の彼はつめえりの服を着たグリグリ頭の可愛らしい少年で，黙々として働き，何処か負けん気の強い所もあって，よく頑張っていた。仕事の関係もあって，写真機を始めて手にしたのもこの頃のことである。

其の後，私は東京へ転勤して間もなく応召，長らく故国をあとにしたし，彼も入隊してしまって相会することもなく終戦を迎えた。

私が南方から復員し，彼がソ連の抑留生活から引き揚げて来て，久し振りに東京で生きて帰った喜びを語り合ったときの私の印象は，10年前のそれとまるで異なったものであった。彼は生き生きとして実によく語り，私を圧倒せんばかりの気慨に燃えていた。

この頃には，写真の技術も確かなものになっていたようである。

32年にソ連邦に旅し，その作品の一部「ソ連民衆の表情」を発表して間もなく，彼は本庁に転任した。蓋し彼の写真家としての特技を高く評価し，広く活用したいとする上司のはからいであったろう。

此の度発刊の運びとなった本書は，林業技術者である彼が，長い写真の経験と研鑽を通じて得た成果を本来の職域のため公開したものであって，彼の真骨頂が此処に集大成されたと言って過言ではないであろう。

由来林業家に写真はつきものである。

森林の実態をよく把え，複雑な現象を理解するのに好都合だからであろう。

林業実務者はもとより，広く写真愛好家の熟読を期待する次第である。」　（参議院議員）

この序文を書いていただいたお礼の言上のため古めかしい議員会館の一室を訪れた時，

「君に，本当に写真を教えたのは，宮崎さん（宮崎榊氏）か？」と聞かれた。

「はあ，宮崎さんからも教わりましたが，実際，手にとって教えていただいたのは大内さんです。」と答えると，「そうか大内君だったのか」と笑った。

強度の近視であるわたしは，兵隊検査当時，もっとも不名誉とされた丙種合格を宣告された。ままよ，南方へ行って写真でも撮りまくってやれと，局長の岩崎さんに申し出ると，岩崎さんはじっとわたしの顔を見つめて，「君，南方へ行くと死ぬぞ。」と許して下さらなかった。その時はそのまま引き下がったが，他の人はビルマなどにどんどん行ってることでもあり，あきらめ切ることができず再びお願いにあがると，「君，どうしても行きたいのか。」と一瞬さみしそうな顔をなされた。わたしは調査課（岩野三門課長）に籍をおいていたが，局長の秘書のような仕事をしていた。岩崎さんは孤独の人であり，片腕ともいうべき石谷さんが二度目の応召で南方にあったので，日常なにかと寂しそうであった。局長はわたしの決意が固いのを見て，「小さい会社では危険だから……」と帝大の同級生が支配人をしているという，住友本社に推薦状を書いて下さった。

住友本社での試験にもなんとか合格して，南方のスマトラ行きが本決まりになったある日，突然シンガポールの石谷さんから手紙が届いた。

「君が営林局をやめ，住友林業に入社してスマトラにくることを，局長からの手紙で知った。船はスマトラに渡る前に必ずシンガポールに寄港するはずだ。その時は司令部へ書き給え，僕は兵隊の星はいぜんとして二つだが，林政の顧問をやっているから，車も二台もっているし，君の市中見物にはことかかない……。」

それは昭和18年４月のことである。

わたしは大阪から出港直前，召集令状を手にした。丙

種合格でもあり，3カ月位の教育召集と思ったのが，弘前で1週間位過ごしたのち直ちに満洲に，そして昭和20年終戦とともにシベリヤに送られる羽目となった。南方行きが思わぬ北方行きになってしまったのである。

昭和23年夏，シベリヤから引き揚げたが，戦時中食糧事情の悪かった大阪のことを思うと，どうしても大阪の住友本社に出社する気になれず，手紙で辞職願を出すとともに，秋田の営林局に復帰することになった。

24年の夏（記憶にまちがいなければ），事業部長(水野金一郎氏）から電話があり，「すぐ部長室までくるように」という。事業部長には日頃あまり縁がなかったので，いぶかりながらドアをノックして中に入ると，そこには思いがけないタンク殿が，相変わらずエネルギッシュな体で，でんと部長の机の前に足を組んで座っていた。

あまりの懐かしさに，しばらくは声にもならず，思わず昔の直立不動の姿勢をとっていると，「やあ，八木下君，元気でよかったな，君がスマトラへくると，岩崎局長の手紙にあったので，シンガポールに寄港した際，君を大いに歓待してやろうと思っていたのだが，スマトラへは来ずに，満洲，シベリヤに行ったんだってね。しかしよかったよ君，南方に行ったら今頃死んでおったかも知れない。顔も元気そうだね，今は組合運動をやってるんだって……。」タンク殿はわたしの顔を見つめながら，矢つぎ早やに言葉をかけた。その瞬間，そうだ，俺は昔の俺ではない。満洲で終戦の日から始った敗走，その途中での反乱した満軍との死斗，さらに背後から襲ってきた，三百輌からなるソ連の機械化兵団への数度の肉迫攻撃，その夜から投降するまで20日間，一きれの食物もなく，湿地の泥水をすすり，闇夜の山野を彷徨しながら，九死に一生を得て来た俺だ。シベリヤの収容所生活でも，世のインテリと称する多くの人間のぶざまな生活態度を見せつけられ，反発してきた俺ではないか。猛然とわたしの体内に勇気が満ちていった。

「ありがとうございます。昔のようにきょうも石谷さんの前で不動の姿勢をとってはおりますが，わたしは昔の八木下ではありません。今は，はっきりと，ものをいえる人間になりました。」不遜にもその時のわたしの眼はギラギラと燃えていたかも知れない。

「よし，それはおもしろい。今度東京に来た時，林野庁に寄りたまえ，一晩理論斗争をやろうではないか。」

タンク殿はギョロ目を輝やかせるようにいった。その後わたしは，労働組合の仕事や写真の勉強でしばしば上京しては，計画課長，業務部長，はては長官室へと訪れてよく議論を持ち込んだ。

おしつけ林政，強引林政，などと末端ではとかく誤解されがちな石谷林政を，よりスムースに効果的に遂行するには，理解されるべき努力，たとえば，広報活動をもっと活発に行なうべきではないか，などと，おこがましくも深更まで長官室で談じこんだこともあった。

「私が南方から復員し，彼がソ連から引揚げて来て，久し振りに東京で生きて帰った喜びを語り合ったときの私の印象は，10年前のそれとまるで異なったものであった。彼は生きいきとして実によく語り，私を圧倒せんばかりの気概に燃えていた……」と序文に書いて下さったのは，この頃のことであろう。

終戦のとき，敗走に敗走を続け，満軍と戦いソ連軍に襲われ，さらに食もなく20日間山野を彷徨するうち，屈強な戦友たちが次々と命を絶っていった中で，わたしが今日なお健在でいられるのは，石谷さんから鍛えられた，不屈の精神があったからに違いない。

今年のグリーン賞は，青森の橋本正武氏が受賞された。わたしはうれしかった。「林政記者クラブ諸氏の目も満更ではない。」と，酒の勢いばかりでなく，パーテーの席上で放言してはばからなかった。それは，石谷さんが橋本さんのような清廉で誠実な人を，人一倍尊敬し愛されたからである。橋本さんの受賞を，石谷さんは地下で心から喜んでおられることだろう。

火葬場で煙突から夕暮れの空に吐き出される煙をじっと眺めていると，「石谷さんの煙を撮ったかね。」静かな声がして徳本さんが寄ってきた。「はい，撮りました。」そう答えながらわたしは煙りの行く先を見つめていた。あの煙は空に散り，そしてまた母なる大地に舞いもどるのだろうか。

わたしはもっと議論をふっかけ，そして甘えたかった。だがその人はもういない。

ホルモンタンク殿の声はもう二度とは聞くことができないのだ。

お寄せいただきました皆様方の原稿は，故人の経歷に従って配列掲載いたしましたのでご諒承下さるようお願い申し上げます。
〔編集室〕

連続講座

森林土壌解説

土壌断面のしらべかた

(2)

久保哲茂
〔林試・土壌調査部〕

構造　これは土壌に特有の形成物であって，成因的にも林業的にもきわめて重要な意味をもっている。すなわち林業的には，構造の種類や発達状態→孔隙状態→透水・通気・保水→林木の成長という一連の関係のあることがすでに「物理性」の章で述べられている。また生因的には，環境によって種類や発達程度の異なった構造が形成されること，したがってそれが土壌型判定の大切な決め手の一つとなっていることをあげねばなるまい。ただこれに関しては「土壌生成」の章で詳説が予定されているので，本章では断面調査に必要な面の解説にとどめよう。

構造は各層ごとにその種類，大きさ，発達程度，分布状態などについて調べる。発達顕著な場合には，断面のその部分にそれぞれ特有の肌や隙間が認められる。掘り出した土塊の崩れかたや，砕けてできた小片からも構造の発達程度や種類を知ることができる。詳細に調べるには，断面から移植ごてで土塊をえぐり取り，それを軽く押しつぶすように力を加え，その砕けかたと砕けた小片を観察する。また両手の指先でゆっくり割って行くと，団粒を形成している場合には，形や大きさのほぼ揃った小片に分かれる。団粒を形成していないカベ状構造の場合には，力の加え加減で大小さまざまな無定形の小片に割れ，その小片はどの面も同じような肌（色・滑かさなど）を呈している。比較的大粒のものについてそれが1個の団粒にまで分かれたかどうかは，さらにそれを割って見て，形や肌が変わるかどうかを調べればよい。

種類は表6－aに示すように，主として外形に基づいて区別する。大きさや発達程度も種類と同様に生因的にも林業的にも重要であって，表6－b，表6－cのように区分する。なお1つの団粒を指間でつぶした時の堅さを併記しておくとよい。また層の全面に発達しているか局部的にあるか分布状態についても調べ記載する。1つの断面，1つの層位に1種類の構造しかないというわけではない。混在しているものを見分けてそれぞれを記載するとともに，どの構造がその断面，あるいはその層位を特徴づけているかを把握しなければならない。一般に乾性土壌の構造は小粒で堅く，また下層ほど，未熟なものほど発達は弱いといえる。

表6－a　土壌構造の種類

名称		略号	特徴
団粒 aggregate	板状構造 platy	*pl*	水平方向にひろがりをもち，板状を呈するもの。
	柱状構造 prismatic	*pr*	垂直方向に長く柱状を呈するもの。円柱状と角柱状がある。
	塊状構造 blocky	*bk*	立方形に近い形状を有する比較的大型（約10mm以上）のもので，稜角に丸味があり，面は粗糙である。
	堅粒状構造 nutty	*n*	立方形に近い形状を有し，稜角は尖鋭で面は平滑明瞭である。緻密で堅い。
	細粒状構造 loose granular	*l. gr*	さらさらした微細な土粒が菌糸でつづられた状態のもの。虫のつづったメリケン粉に似ている。
	粒状構造 granular	*gr*	球形ないし立方形に近い形状を有する比較的小型（約10mm以下）のもので，緻密で堅い。丸薬に似ている。
	団粒状構造 crumb	*cr*	かなり小型（約2mm以下）の丸味のあるもので，軟らかい。この集ったものは膨軟でパン屑状に似ている。
単粒構造 single grain		*sg*	河原や砂丘の砂地のように，粒子相互間につながりがなく，個々の粒子がばらばらの状態のもの。
カベ状構造 massive		*m*	粒子が大きいマス（mass）として均質無定形に密着連結し，カベ状を呈するもの。ヨウカンに似ている。

孔隙　既に「物理性」の章で，孔隙の大きさ，機能，構造や土性との関係などについて説明があった。しかしここでいう孔隙とは，大小さまざまな孔隙のうち，肉眼的に断面で認められる比較的大きい孔や割目を指している。最も見つけやすいのは小動物が作った孔や根の跡などであって，これらは管状は長く連らなっている。これらからかれらの生活圏や活動の強弱を知ることができよう。また乾湿交替や凍結溶融交替に伴う土の体積変化に

表6－b　団粒の大きさの区分基準

区分	区分基準（径または厚さ：cm）					
	板状	柱状	塊状	堅果状	粒状	団粒状
巨（極厚）	＞1	＞10	＞10	＞5	——	——
大（厚）	0.5～1	5～10	5～10	2 ～5	0.5～1	——
中	0.2～0.5	2～ 5	2～ 5	1 ～2	0.2～0.5	＞0.2
小（薄）	0.1～0.2	1～ 2	1～ 2	0.5～1	0.1～0.2	0.1～0.2
微（極薄）	＜0.1	＜ 1	——	＜0.5	＜0.1	＜0.1

1.　たとえば「小堅果状」，「巨塊状」などとよぶ。
2.　板状構造には（　）内の語を冠する。

表6－c　団粒の発達程度の区分とその判定基準

区分	判定基準
強度	個々の形状がきわめて明瞭であるもの。
中度	やや明瞭なもの。
弱度	やっと識別し得る程度のもの。

よって垂直方向や水平方向に長い割目を生じていることもある。

もっと細かく考えると，団粒相互間や土壌粒子相互間の隙間がある。堅果状構造のよく発達した土壌では断面に亀甲状の割目が美しく見られることがある。しかし一般に微細な構造相互間の孔隙を肉眼観察して具体的に記載することは困難である。これらは顕微鏡観察や物理学的手法によって明らかにされるものであって，微細土壌学や土壌物理学の主要な研究対象となっている。そこで断面調査では，前述の構造と次に述べる堅密度の記載がこのような微細な孔隙状態を代弁していると考えてよい。

孔隙は断面および土塊を割った面について，各層ごとにその形状，大きさ，分布状態などを調べる。なお，孔隙の周囲が鉄銹色や暗色に汚染されていたり，管壁に鉄銹色や黒色の沈澱物が付着していることがあるので見落してはならない。

堅密度　これは断面を親指で押しつけた時の抵抗の度合によって表7に示した6階級に区分する。石礫や根の部分を避けて調べるのはもちろんであるが，同じ層でも部分により抵抗にちがいがあることが多いので層ごとに数カ所押してみる必要がある。同じ層で部分によりちがいのある場合には，たとえば「堅・局部的に軟」，あるいは「堅および頗る堅」と記載する。抵抗が表7の基準にぴったりあわない場合もある。特に「軟」と「堅」の中間にあたる場合がかなり多い。このような時は「やや堅」と記載する。

このようにして調べた堅密度は，異物の侵入に対して示した抵抗，つまり粒子相互のつながりの強弱，変形の難易，孔隙の多少などいろいろな物理的性質の総合されたものを表わしているわけである。堅密度は農地では耕耘作業の難易に直接結びつく重要な性質である。林地においても前述のように孔隙状態を知るのによい手掛りとなる。林木にとっては軟い土層が深いほどよい。崩積土では一般に深くまで軟らかく，根の発達に良い条件を形成している。

表7　堅密度の区分とその判定基準

区分	判定基準
頗る鬆*	土粒がバラバラに分離していて，ほとんど結合力のないもの。断面の調整に苦労することが多い。
鬆*	土粒の結合が弱く，土塊は容易に崩れるもの。指で断面を押すと容易に貫入する。
軟	土粒は比較的密に結合してるが，断面を指で押すとへこむもの。
堅	土粒が密に結合しており，指で断面を強く押すとわずかに指痕ができるもの。
頗る堅	土粒が密に結合しており，指で断面を強く押しても指痕ができないもの。
固結.	土粒が密に結合しており，やっと移植ゴテをさしこむことができるもの。

＊「鬆」の代りに「粗」または「疎」と書いてよい。

水湿状態　土壌中の水分についてはすでに「物理性」の章で詳説された。断面調査では表8に示すように各層ごとの土塊を掌で握ったり，指間で圧した時の濡れ具合で区分する。このようにして判定された水湿状態とは，土壌中の含水量の多少を示しているわけではなく，「植物にとっての土壌の乾湿」，つまり「土から離れやすい水分，植物に有効な水分の多少」をほぼ示しているのである。ただこれは調査時点の水湿状態を調べているため，同じ土壌でも乾燥期と雨期，晴天と雨天では異なってくるのは当然である。このため調査当日およびそれ以前数日の天気を記録しておき，後日の検討に混乱をおこさせないようにする。

表8　水湿状態の区分とその判定基準

区分	判定基準
乾	土塊を強く握りしめても掌に湿りを残さないもの。
潤	土塊を握りしめると掌に湿りを残すが，「湿」にはいたらないもの。
湿	土塊を親指と人差指の間で強くつぶすと水がにじみでるが，「多湿」にはいたらないもの。
多湿	土塊を握りしめると指間から水滴がにじみでるもの。
過湿	土塊を掌にのせただけで自然に水滴がしたたりでるもの。自由水を持っている状態。

ところで乾性褐色森林土とか湿性褐色森林土とか土壌の名称に使われている「乾性」，「湿性」はここでいう水

湿状態とはちがう。これはその土壌を年間を通じて見た場合，乾きにかたよっているか，湿りにかたよっているかを意味しているものである。

根　土壌が植物と接するのは根である。根の張りかたは樹種本来の性質と土壌条件とに支配されている。断面調査ではその土壌が根にとって良い条件を有しているかどうかを直接根の発達状態から読み取ることができる。一般に乾性土壌では表層に根が密に集中しているのに対し，適潤で深くまで膨軟な土壌の断面では，全層にわたってまばらに認められるに過ぎない。過湿な土壌ではある深さで根は下方へ伸びることを停止している。そしてその付近に多数の腐根を認めることがある。これは地下水位の季節的変化を示すもので，水位の下った時に伸びた根が水位の上がった時に酸素不足で枯死したためである。このような場合にはふつうそれを裏付けるようにグライ斑や斑鉄が認められる。下層が堅くしまった土壌でも根の発達が妨げられていることが多い。また砂礫層やA′層の介在する時も特異な根の発達が認められる。

根は層ごとに木本と草本に分け，木本については表9－aに示す径級別にその量を調べる。できれば主林木の根と優占する林床種の根を特に区別して調べたほうがよい。量について方法書は表9－bに示す5階級に区分するよう指示しているが，その区分基準は示していない。そこで筆者は土壌断面に対する根の切断面の占有面積の大小から表9－bに示す仮の区分基準を試作し使用しているので参考までに掲げておく。

表9－a　木本の根の太さの区分基準

区　分	区分基準（根の直径：mm）
細　根	＜2
中　根	2～20
太　根	＞20

表9－b　根の分布量区分とその判定基準案

区　分	判定基準（占有面積割合%）*
極めて多	＞20
多	10～20
あ　り	5～10
稀	＜5
な　し	0

*　筆者の試案であって，方法書には規定されていない。

また腐根や特異な条件に適応してできた変形，奇形などについても記載し，スケッチにも書き加える。

菌糸および菌根　マツ，ツガ，シイなどの林では断面に菌系がはびこっていることがある。乾性の土壌ほどよく発達し，極端な場合にはその遺体がからみあってできた菌糸網層（M層）がA層上部やA_0層に形成される。これらはふつう外生菌根という菌――多くはキノコを作る――のしわざであって，樹種，菌の種類，土壌の乾湿などにより発達程度や形態が異なっている。ふつう疎水性があるため雨水を通さず，ますます土壌の乾きを促進する。

このほかに湿潤な土壌ではF層や膨軟なA層に軟かいカビ類の菌糸を認めることがある。

いずれも，色，形状，分布状態などを記載する。

その他の調査事項　以上が林野土壌の断面調査における主要な調査項目である。しかしこれら以外にもかなり重要な特徴，たとえば鍬で掘る時の手ごたえ・掘り出した土塊の崩れかた・鍬や靴への泥の付着ぐあい・歩く時の足ごたえ・土層内で認められた虫の種類や数・虫糞・過去の植相や土地利用を物語る炭片・菌の臭・腐敗臭などを見落してはならない。これらを書き加えることによってその土壌の特徴をより鮮明に表現することができよう。鉄，マンガンその他の移動集積によって形成された堅い粒状の沈澱物（結核）や斑状着色（斑紋）・グライ斑なども土壌生成を知るためにきわめて重要である。

また，調査時点では観察し得なかった季節的現象やいくつかの性状の季節的変動，たとえば霜柱，凍結，根雪などの期間や程度・融雪期や雨期における水湿状態や表面侵食の状態・乾季における水湿状態や風食状態などを地元の人から聴き取り記録しておく。これらの話の内容から，土層中において毎年繰り返えされた水分や温度の季節的変動の特徴を知ることができよう。そしてこれら現象のいくつかは，それを裏付けるような特徴となって断面に現われていることがある。たとえば多雪地方では融雪期の過剰な停滞水のため，尾根筋の乾きがちな土壌にさえ灰青色の還元斑が形成されていることがある。

なお，地元である特定の土壌や層を指して使われている呼名――クロボク・オンヂ・イモゴ・コラ・ボラ・マサ・ミソツチなど――があれば記録しておく。遠い祖先から受け継がれてきたこれら名称はその土壌や層の特徴を端的に表現していることが多い。

以上のようにして調べた結果を総合し，土壌の種類を決め，その良否を判定するのであるが，その内容は後に予定されている土壌型の説明とまったく重複するので本章では省略する。

（9ページへつづく）

本の紹介

伐木運材の経営と技術

三品忠男
有馬孝昌
A 5 判，P.215
950 円
地球出版発行

わが国の伐木集運材技術は，戦後急速に近代化され機械化され，収獲業務の管理経営手法においても新しいものが次々と導入されてきた。したがってそれぞれの分野においては数多くの研究報告や参考資料が発表されているが，近代的伐木集運材(logging) 全般について総合的に記述解説した適切な参考書がなかったので，本書の刊行はまことに時宜を得たものと思われる。

あらためて紹介するまでもなかろうが，著者の三品氏は戦後の国有林の機械化作業推進を担当した中心的人物の一人で，沼田機械化実験営林署発足時の署長であり，林野庁業務課機械班長をへて，現在は北炭農林の技術重役として活躍中である。有馬氏は最近まで林野庁業務課機械係長として林業機械化の改善推進に尽力した人で，すぐれた識見は現役中堅技術者の中においても注目されている。

本書の内容は，まず木材生産の意義とその歴史から説き起こし，次いで生産計画，製品管理，原価管理，労務管理と経営的技術面について懇切かつ具体的に，多くの実例や図表を引用して解説し，さらに実際の機械作業技術的分野については，作業仕組みの決定，機械の選択と更新などの考え方を，個々の機械作業につき，管理運営実務は役立つように詳しく具体的に説明している。後段においては，各機械作業の功程につき，それぞれの章を起こして多くの実例を引きながら解説してあるので，作業関係業務の座右の書として好適である。

A 5 判，224 頁という限られた紙面の中に，現在すでにかなり高度に分化発展しつつある伐木集運材技術について，ここまで要点をつかんで取りまとめられたことはりっぱである。今後著者達のあとを継ごうとする人達に対し，現在第一線業務についている技術者の人達に対しても推薦したい。　(中村英碩)

下記の本についてのお問い合わせは，当協会へ

新書コーナー

書名	著者	
農家を支える山林	紙野伸二 山村良雄 編著	新書判，P.360，480円(〒70) 農林出版発行
林分密度管理図とその使い方	安藤貴	線画，色分け4色，120円 (〒50)，農林出版発行
(わかりやすい林業研究解説シリーズ) カラマツ造林木の重要病害	伊藤一雄	A 5 判，P.50，150円(〒10円) 林業科学技術振興所
(〃) 林木のタネの生産と発芽	浅川澄彦	A 5 判，P.50，150円(〒10円) 林業科学技術振興所

古書は，冊数が少なく，ここに紹介してありましても，すぐに売りきれになってしまう場合もありますのでご了承下さい。

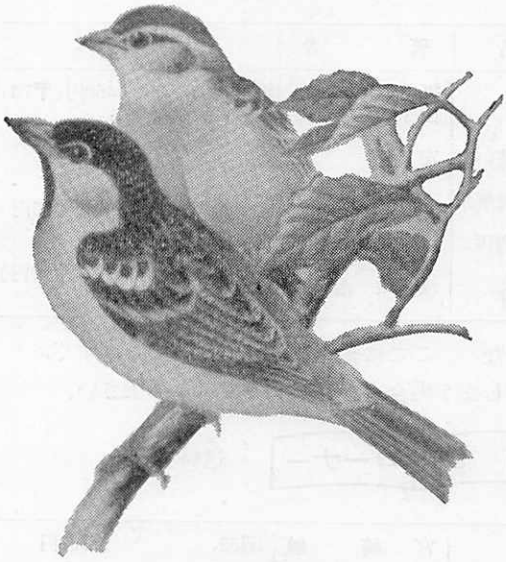
古書コーナー

送料実費

苗木育成法	宮崎榊	昭32，	1,300円
林学講議 (Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)	三浦伊八郎 薗部一郎	昭5，	600
林業政策論	甲斐原一郎	昭30，	550
測樹学要論	吉田正男	昭5，	850
林業経営経済学	野村進行	昭30，	350
理論森林経理学	吉田正男	昭10，	350
林学実験書	東京大学農学部林学教室	昭31，	400
育林学新説	中村教授還暦記念事業会編	昭30，	800
草地の造成と管理 (2冊)	三井計夫	昭36，	450
森林航測概要	中島巌		400
写真測量	尾崎幸男	昭34，	350
森林調査法の実務	片岡秀夫	昭34，共同印刷KK出版	450
造林に関する主要研究の造林技術の指針	東京営林局	昭25，	450
わかりやすいO・Rの話	稲田献一	昭35，	450

— XVIII —

山にすむスズメ



スズメといえば，わたくしたちの家のまわりにだけいるものと思うけれども，じつは種類によっては林のなか，それもりっぱな森林の形態をととのえたものに生息しているのである。そのスズメはニュウナイスズメとよぶ種類である。「ニュウナイ」とは漢字で「入内」と書くのである。これにはおもしろい伝説があるので，のちほどご披露しよう。

ニュウナイスズメは，普通のスズメと異なったいろいろな習性をもっている。しかもスズメとはごく近縁であり，姿もよく似ているのに両者のちがいは非常に興味深いことである。これらの点について，スズメと比較しながらその生活をつぎに紹介することにする。

2 種のスズメ

まえにも述べたとおり，スズメのなかまには，普通にスズメとよんでいるマスズメと，ニュウナイスズメとがいる。どちらも動物分類学的には，スズメ目キンパラ科スズメ属というのが，かれらの動物学上の戸籍である。

マスズメの形態や羽毛の色彩については，もう説明する必要もないであろうが，これをいざ文章で書くとなると，その表現はなかなかむずかしいもので，いざ記載するとなると手を焼くのである。ニュウナイスズメの記載もやっかいなものであるが，まず大きさは，マスズメよりやや小さいと思っていただこう。そしてマスズメでは，オスとメスの羽色が同じで，どちらがオスであるか，メスであるかわからないが，ニュウナイスズメでは，背面がスズメより赤みが強く美しい色彩をしている。英語でアヅキイロスズメ（Russet SPARROW）とよぶのもこのためである。また，この鳥の特徴となるのは，マスズメの顔にある黒ずんだ羽毛がないことである。このため顔はやわらかい感じがして，マスズメのような強い，いじわるそうな感じはない。メスはこれにくらべると背面は赤みがなく灰褐(かっ)色であり，咽喉(のど)のところにある黒い部分がないから，オスよりさらにおとなしい感じをあたえる。さらに目のうえのところを横にはしる黄白色の淡い線があるから，なかなか粋(いき)である。形態学的にはこの目のうえにある横斑を眉(び)斑とよんでいる。

さて，マスズメはヨーロッパからアジア，そしてアフリカ北部が原産地である。ところが北アメリカとオーストラリヤには，自分たちのふる里の動物を恋しがる移民たちが輸入して放した。それがいまでは大増殖して農作物に被害をあたえるので困っている。これでもわかるとおり，動物の輸入は慎重に行なわなければならない。

マスズメが世界的に分布しているのにくらべると，ニュウナイスズメは限られている。そうはいっても，インド奥地からヒマラヤ，そしてビルマ，中国，台湾，朝鮮半島，日本，さらにサガレン（樺太），千島列島にかけて生息している。いま述べた順序を地図のうえで追ってみると，日本にいるほかの動物，たとえば，サル，カモシカ，キジなど，ヒマラヤ系の動物が東方へひろがってきた地質時代に，これらのなかまと日本列島にやってきたことがわかる。もちろん，そのころにかれらの好む環境がこの方面にできたのであろう。たとえば，気温の上昇による広葉樹林の成立などが考えられるのである。ヒマラヤ系の動物は，どちらかというと温帯的な気候を好む習性があるから，まず日本の北部の気候なら好い条件なのであろう。そのためニュウナイスズメのいるのは，本州の中部から東北，北海道地方にかけてである。

ニュウナイスズメのすみか

温帯性の鳥であるニュウナイスズメは，とうぜんのことであるが温帯林にすむ。とくにその落葉広葉樹には，巣に利用する樹洞(どう)が多くあるから，この林にすみつくわけである。たとえば，ナラ・ミズナラ・カバ・ドロノキなどのある林である。したがって，この鳥はわが国では北海道に多く繁殖することになる。おもしろいのは，これらの落葉広葉樹林にはたくさんいるが，その付近にあるエゾマツやトドマツの針葉樹林には姿すら見られないことである。鳥の分布がこれほど林相に結びついているのも，めずらしいことである。

北海道では，落葉広葉樹林は平地に発達しているから，かれらも平地の鳥で，開拓地のまわりにすんでいて農耕地で虫などを食べている。もちろん，植物質のものも多くとるから強い雑食性である。したがって，春から夏にかけては動物質のものが中心である。このため北海道では農林業にとっては益鳥なのである。

ところが，本州ではその事情が異なっている。本州での落葉広葉樹林は，標高1,200～1,500mのところにあるから，かれらは当然のことながら山間部にすむことになる。また，本州の中部以南には，この林相の発達は乏しいから，おのずから分布に限界を生じてくるわけである。ある研究者は，この限界にニュウナイスズメの学名であるラティランス (rutilans) にちなんで，「ラティランス線」と名づけたが，それは皮肉なことに落葉広葉樹林帯の限界と一致してしまうのである。

いまわかっている繁殖の南限は，群馬県の赤城山で，この山の標高 1,300m にある大沼の湖畔にある落葉広葉樹林である。関東平野の美しい独立峯であるこの山は，スズメの分布でもおもしろい。それは大沼の湖畔にはニュウナイスズメがいるが，マスズメは標高 600m あたりの人家にまでしか生息していない。大沼の湖岸にはもちろん人家はあるのだから，迷ってでもすみつくマスズメがいるはずなのであるが，１羽も見ることができないのである。岐阜や日本アルプスの山間部では，１軒でも人家や山小屋ができると，そこにすみつくマスズメがいるのであるが，赤城山ではあきらかに生息地域が異なっている。やはりマスズメは平野の鳥なのである。

さて，ニュウナイスズメが落葉広葉樹林にすんでいるのは，繁殖の時期だけである。秋から冬にかけては，この林には食物もなくなるし，雪も降るからこれより暖かい食物の多い地方に移動する。北海道や東北地方に繁殖するものは，大群となって秋田県から新潟県の水田地帯に渡ってくる。そして池沼のほとりにあるヨシ原に休んでいて，何千，何万の群れになるのであるから，その食べる量が１日１羽10グラムぐらいであっても，たちまち驚くほどの額になってしまう。したがって，米どころの農家にとっては大敵である。それが乳熟期にはいったイネをねらうので，これを追うようにして南へと移動して行く。ところが，九州の南部にある鹿児島県出水市には，８月になると集ってくる。この鳥は九州や四国には繁殖していないのであるから，これは朝鮮半島のものが渡ってくるらしい。

ニュウナイスズメの巣と卵

ニュウナイスズメの巣は，樹洞(どう)を利用するのが普通で，自分で枝などに営むことはない。ところが，マスズメではときおり枯れ草などで枝のうえにつくることがある。ニュウナイスズメは樹洞の底に枯れ草などをひき，そのなかに５～７個の卵をうむ。卵は暗い樹洞のなかでも，そのありかがわかるように白色で，そこに褐(かっ)色の斑点がある。大きさは18×13ｍｍぐらいで，重さはほぼ３ｇである。ヒナは13～14日でうまれるが丸裸である。そして15日間は親鳥から虫などをもらって育つのである。繁殖は１年１～２回で，５～７月ごろに行なうのが普通である。このころに林のなかで見ることが多いわけである。この鳥の渡りについては，農林省で足輪による調査を行なったことがある。これによると秋田県に集ったものは，中部地方から四国・九州方面に移るし，岐阜県で放したものは関東地方にきたりしている。この鳥の足どりは，農林業のためにさらに詳しく調べる必要がある。

ニュウナイスズメの伝説

はじめにも述べたように，「ニュウナイ」とは「入内」で，ふるくは宮中に入ることである。これには古い伝説が「大和本草」にでている。

むかし，実方の中将という人がいた。かれはふとした誤ちがあって罪にとわれ，東国に流されてしまった。しかし，都にもう一度かえって宮中にあがりたいと思いながら，ついに死んでしまった。それでかれの霊はスズメと化して都に帰って宮中にはいりその目的を達することができた。これ以来，このスズメを入内スズメとよぶことになったという。

○　○

付記：19回にわたってご愛読いただいた「林野の鳥シリーズ」も，今回で終ることになりました。ながらくの愛読を感謝して筆をおきます。

○　○

⇨第10回国土保全大会

日本治山治水協会，日本林道協会，公有林全国協議会共催の第10回国土保全大会は11月2日午前10時から東京・虎の門の日消ホールで開かれ，次の決議を行なった。

決　議

1.　林業の長期安定的発展と農山村の興隆のため林道網整備の促進を期する。

対　策

1.　林道補助体系整備の実現と林道施策の拡充

2.　峰越連絡林道の事業量の増大と採択条件の緩和

3.　災害林道の早期復旧と補助の増率

4.　起債枠の拡大の措置の融資条件の改善

2.　国土の保全と水資源の涵養により産業と生活の基盤を確保するため治山事業の拡充強化を期する。

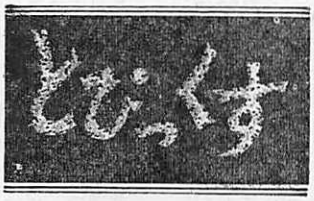
対　策

1.　治山事業5カ年計画の全面改訂と拡充実施

2.　予防治山事業の拡大強化と補助率の引上げ

3.　小規模治山事業の国庫補助の法制化の実現

4.　保安林整備事業の推進と管理の強化



3.　地元産業の振興をはかり，国有林経営の指標となるため公有林造林の推進を期する。

対　策

1.　拡大造林特別措置法の制定

2.　公有林造林融資枠の拡大と融資条件の改善および公団，公社造林事業の積極的推進

3.　入会林野整備事業の促進と整備後の造林に対する優遇措置

4.　公有林に関する行政指導及び管理機構の整備強化

⇦国有林の売払い，貸付け，交換を一時中止（長官通達）

10月31日付で，林野庁は長官名で各営林局長に対し「国有林野の管理処分についての暫定措置」を通達した。この通達は，国有林の交換，貸付等について国会で問題になっているのでその基準が定まるまで，特別の場合を除き国有林野の売払い，貸付け，交換を一時中止する，というものである。

⇦甲山森林組合に天皇杯

41年度第5回農業祭の林産部門の天皇杯受賞者は，11月9日開かれた中央審査会（東畑精一会長）で，広島県世羅郡甲山（こうざん）町の甲山森林組合（代表者・西谷幸穂組合長）に決定，この表彰式は23日午後2時半から東京・日比谷公会堂で開催された農業祭式典で行なわれ，松野農相から伝達された。

甲山森林組合が天皇杯を受賞したのは，林業経営種目に「森林組合協業」として出品したものである。

林業用語集
〔森林土壌〕

surface soil　表層土
subsoil　下層土
substratum　基層
groundwater soils　地下水系土壌
gley　グライ
soil mycelium　土壌菌糸網層
fine soil　細土
fine earth　細微土
gravel　礫
coarse sand　粗砂
fine sand　細砂
silt　微砂
fine gravel　小礫
medium sand　中砂
very fine sand　極微砂
texture　組織
soil class　土性
sand　砂土
sandy loam　砂壌土
loam　壌土
clay loam　埴壌土
clay　埴土
with some　含む
very rich in　すこぶる豊富
sieving　篩分析
hydraulic analysis　淘汰分析
elutrian method　洗滌法
sedimentation method　沈泥法
soil structure　土壌構造
aggregate　集合粒子体
single structure group　単粒構造群
compound structure group　安定集合構造群
type of structure　構造型
kind of structure　構造類
species of structure　構造種
single grained　単粒型
amorphous　無定形型
massive　マツシブ型
pulverulent　粉状型
puddled　凍土型
structureless　無構造
platy structure　板状構造
prismatic structure　柱状構造
blocky structury　塊状構造
poorly developed　発達の貧弱な
weakly developed　発達の弱度の
moderately develoed　発達の中庸の
well developed　発達の良好な
strongly developed　発達のきわめて顕著な

ぎじゅつ情報

★農薬の野生鳥獣に及ぼす影響について

研究発表者：林業試験場鳥獣科長　池田真次郎

発表誌：林試研究報告第186号（1966）

研究発表事項：つぎのとおり。

1.　供試薬剤の種類＝ＥＰＮ(45%)乳剤，ＢＨＣ(10%水和剤)

2.　供試鳥獣の種類＝スズメ，キジバト，チュウサギ，チュウダイサギ，キジ，ウズラ，イタチ

★浸透性殺虫剤に関する特集記事

誌名：新農薬（第20巻第3号1966，三共株）

記載事項の主なるものはつぎのとおり。

(1)害虫防除における浸透性殺虫剤の役割……
弥富喜三（名古屋大学農学部教授）

(2)土壌施用浸透性殺虫剤による害虫防除……
筒井喜代治（東海近畿農試虫害研究室長）

(3)浸透性殺虫剤によるトドマツオオアブラの防除……
山口博昭（林試北海道支場昆虫研究室長）

(4)浸透粒剤雑感（その問題点と今後のありかた）……
野村健一（千葉大学園芸学部教授）

★草地開発についての日本政府への報告書

国際食糧農業協会，のびゆく技術36（1966.8.10）

1955年から1963年の間，国連食糧農業機関が国連拡大技術援助計画に基づいて日本政府を援助するため，9回にわたって草地開発に関する専門家を派遣してきたが，この報告書はそれらを総括した最終報告で，本書はその翻訳である。その内容は，報告の目的，環境諸条件，畜産振興と国民栄養の見地からの国家政策，土地分類と土壌保全，野草地の開発，大規模草地事業の管理問題，植栽材料，草地造成管理および利用，農業経営計画と管理，試験研究，教育と広報，北海道，勧告の要約　の13項目からなっている。

こだま

このほど機会があって、北海道、東北地方の木材工業各社を視せてもらった。名にし負う道産材や秋田スギの本拠を訪ねたわけであるが、どの工場でも、外材の使用率の大きいのにあらためて驚いた。

今頃こんなことで驚くのがどうかしているといえばそれまでであるが、外材インパクト論が叫ばれて数年、ようやく今年に入ってからは、外材輸入量の増大にもかかわらず、国産材価格の高騰という現象をみて、国産材と外材の使用分野が確立され、両者の競合性にある程度の限界が画されてきたという説が、あちらこちらで唱えられてきたときである。

わが国の木材需要に対する国産材の供給不足が明白なのにもかかわらず、外材の輸入に対して林業人が神経をとがらしてきたのは、外材の国産材に対する代替性が、今後の林業生産基盤をおびやかすことを憂いたために他ならなかった。という点からすれば、国産材は国産材、外材は外材のと、それぞれの領域が確立されて、ともどもに手をとり合って、木材需要の確保と発展を期することは、まことにありがたく心強い限りである。止めども止まらぬ外材輸入の増大に対するわが国林業人の不安感が、このあたりで何らかの形で結着づけられたらと期待するのは、ただわたくし一人ではあるまい。

しかし、今回視察した限りでは、合板、フローリング、集成材、木工家具など、それぞれの製品の量的には中核をなす部分はほとんど外材でつくられ、国産材は、その木肌、木目の良さを生かした表層材として使われているに過ぎない。しかも国産材の本場にいるこれらの木材工業関係者は、この傾向が今後ますます強まるであろうことを、絶対的な確信をこめて異口同音に話ししてくれた。

国産材と外材の使用分野の確立が、このような形でなされればこそ、外材需要の増加が、国産材需要の増大と価格の上昇をもたらしたし、またそれは表層材に用いられる銘木、良材と、構成材料として使われる一般材との間に、いわゆる選択的拡大を示したのが、今年の国産材と外材の関係ではなかろうか。外材インパクトとは、価格と量の両面で安定供給されるものによって国産材がうけるインパクトにほかならない。国産材がこれに処する道は、外材に対する関税や輸入制限で解決されるものではなく、国産材自らが量、質、価格の安定という正攻法以外には方策がないであろう。あと何年しかもたないといわれている各地の天然良材が、その華々しい生涯を閉じようとしているとき、せめてその余光の明るいうちに、この方策を確立することの肝要さを、あらためて知らされた次第である。

（K・K生）

ごあいさつ

本会の業務運営につきましては，つねに各方面から温いご支援をたまわりましたことを厚くお礼申し上げます。本年は当協会にとりましては，不幸がつづいておこりましたが，その都度会員の皆様方から深いご同情とご芳情をたまわりましたことを重ねて厚くお礼申し上げます。

つきましては，恒例の新年号での「新年のごあいさつ」は遠慮させていただきます。

ここに本年のご厚情を深謝いたしますとともに，来るべき年における会員の方々のご健勝とご多幸ならびにご関係各方面，各機関の一層のご繁栄を祈念申し上げます。

あわせて当協会に対する今後一層のご鞭撻とご協力をお願い申し上げます。

専務理事　徳本孝彦　常務理事　成松俊男
顧　問　松川恭佐　ほか職員一同

会務報告

◇第9回常務理事会

10月27日(木)，午後3時より本会理事長室で開催。

出席者：島，遠藤，平田，山田，竹原の各理事と本会より松川，徳本，成松，橋谷。

◇森林航測編集委員会

11月10日(木)，午後3時より本会理事長室で開催。

出席者：西尾，正木，中島，石戸，依田の各委員と本会より，成松，中曽根，丸山，八木沢，武田。

◇第10回常務理事会

11月18日(金)正午より本会理事長室において開催し，昭和41年度第2回理事会に上捉する議案を慎重審議し，承認を得た。

出常者：徳本，成松，石井，平田，山村の各常務理事と会会からは松川，徳本，成松，橋谷。

◇第11回常務理事会

11月29日(火)正午より全国町村会館9階食堂別室において開催し，第2回理事会上提議案の細部検討をした。

出席者：竹原，山田，繁沢，遠藤，寺田，須藤の各理事，本会からは松川，徳本，成松，橋谷，藤田。

◇昭和41年度第2回理事会

11月29日(火)午後1時より全国町村会館2階第1会議室において開催昭和41年度上半期事業経過ならびに収支概算を報告し，(1)日林協拡大強化策とくに，会員の増加および支部活動の進め方等の検討，(2)昭和41年度事業実行計画，(3)同資金計画の修正などの議案について協議した。

出席者：理事41名（うち，委任状22名）のほか，松川顧問，各課長

▷編集室から◁

本号は故理事長の追悼特集として故人の林業のために尽された偉大な功績，うちに秘められた豊かな人間性をしのぶよすがといたします。編集に当りましては，座談会に，ご執筆にお忙しい皆様方にご無理をお願いいたしましたが，心よくお引き受けいただきましてこのように立派な追悼号とすることができましたことを心から感謝いたします。

ここに紹介されております理事長のひととなりを読み，日頃仕事の面ではよくギュウギュウの目に合わされていましたので，「ヤカマシイオヤジダナ」という印象が強く，今にして思い当る折にふれて示めされた部下への思いやりといったものをオッカナさが先に立って汲みとれなかったことを悔んでおります。

企画編集室は理事長室の隣りになっております。たまたま来客がない時には，だまって入って来て，おやつのセンベイなど残っているとポンと口にいれて「どうだ仕事の具合は」というようなことで，しばらく息ちきをしていかれたこともありましたが，たいていは客や内部のものが仕事を持ちこんですぐ自分の部屋に戻って行かれました。もっとその警咳に接する機会が欲しかったと残念に思うのです。

（八木沢）

昭和41年12月10日発行
林業技術　第297号
編集発行人　徳本孝彦
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　社団法人　日本林業技術協会
東京都千代田区六番町七番地
電話（261）5281(代)～5
（振替東京60448番）

林業技術　昭和41年－1966（286～297号）

総目次

題名	執筆者	号
巻頭言		
年頭の辞	石谷憲男	286
現地の育林技術発展のために	竹原秀雄	287
育林技術の開発改良と森林施業	小畠俊吉	288
国有林に技術はあるのか	丸田和夫	289
森林とレクリエーション	石井佐吉	290
第20回通常総会を終えて	石谷憲男	291
日本林業技術協会の使命達成のために	徳本孝彦	292
林業の原始性	平田種男	293
林業技術コンテストについて	米田幸武	294
弔辞	松川恭佐	295
林業と木材工業	上村武	296
追悼号によせて	徳本孝彦	297
林業時評		
森林病害虫の防除と自然保護	藍野祐久	290
入会林野近代化に望む	倉沢博	291
入会林野近代化法案提出の背景とその内容	高須儼明	〃
入会権とは何か	松岡勝定	〃
国有林野の一般地元施設制度の現況	斉藤清三	〃
スギの保育形式と材質	加納孟	〃
解説		
北海道における林業および林業技術の展望	小幡進	286
東北林業あれこれ	片山佐又	〃
関西地方における林業の現状と繁栄	徳本孝彦	〃
四国林業の諸問題	渡辺録郎	〃
研究と実践の間	甲斐原一朗	〃
第6回懸賞論文　治山技術向上の具体的方策	日置幸雄	287
チェンソーの防振対策の現況	美濃地忠敬	〃
高冷地における広葉樹天然更新の方向（上）	竹内亮	〃
林木育種ガヤガヤ集	酒井寛一	〃
山地におけるクリ園の管理 (5)	中原照雄	〃
木材価格予測の一つの試算	須郷研次	〃
第6回懸賞論文　治山ダムについて	鈴木隆司	288
これからの造林政策の方向	秋山智英	〃
マツクイムシに強いマツとその林分の育てかた	石崎厚美	〃
高冷地帯における広葉樹の天然更新の一方向（下）	竹内亮	〃

題　　名	執　筆　者	号
クリ山地栽培の概要について　(7)	中原照雄	288
昭和41年度民有林関係林業予算の概要	鎌田藤一郎	289
〃　国有林野事業特別会計	天田俊男	〃
森林火災発生と対策	関川文之亟	〃
スギ造林地の寒害は防げるか	土井恭次	〃
実態調査から見た寒干害対策	今山林	〃
林業と鳥獣	池田真次郎	290
海岸保安林の現状と問題点	浦井春雄	〃
斜面混播造林地の25年後の現状	福田秀雄	〃
第77回林学会大会探訪	編集室	〃
シンポジウム抄録（林業の本質）		〃
森林資源基本計画と林産物需給長期見通しの影響	小畠俊吉	291
林道網計画とその手順の考え方	南方康	〃
林業普及事業のあり方	大矢寿	292
第12回林業技術賞受賞者業績紹介		〃
アメリカの林業技術	子幡正之	295
	片山正英	〃
	松本守雄	〃
	光本政光	〃
	松田敏夫	〃
林業の長期ビジョン	小滝武夫	296
アメリカの林業技術	川床典輝	〃
	山本速水	〃
	金沢裕臣	〃
世界林業会議抄	手束羔一	294
世界林業会議	坂口勝美	〃
〔連続講座……森林土壌解説〕		
まえがき	竹原秀夫	291
土壌の物理性	真下育久	〃
〃	〃	292
土壌の化学性	松井光瑤	293
土壌と植生　I	前田禎三	294
〃　II	〃	295
土壌断面のしらべ方　I	久保哲茂	296
〃　II	〃	297
第12回林業技術賞受賞者業績紹介		293
シンポジウム（日林協関西・四国支部連合会大会から）		289
シンポジウム抄録（第77回林学会大会から）		290
松原専務理事追悼特集	田中重五	291
	石谷憲男	〃
	松川恭佐	〃
	西尾元充	〃
	滝川三郎	〃

題　　名	執　筆　者	号
故石谷理事長追悼特集		
座談会　石谷理事長を偲ぶ		297
石谷理事長のおもかげをしのんで	水野金一郎	〃
	藤井敏也	〃
	伊藤陳重	〃
	小林堅蔵	〃
	森田　進	〃
	相沢平悟	〃
	小畠俊吉	〃
	高田秀雄	〃
	片山佐又	〃
	柴田　栄	〃
	山崎　斉	〃
	大崎六郎	〃
	重元　巌	〃
	山本　晃	〃
	光本政光	〃
	公平秀蔵	〃
	八木下　弘	〃
研　究　発　表		
智頭地方の慣用材積測定法	星川繁広	287
測高器の改良について	高橋胤一	〃
稚苗立枯病の防除薬剤散布補助用具について	浜　武人	288
オスモシルによるマツクイムシの餌木誘殺	岡田英次・井戸規雄	289
スギの植栽本数について	細井守・大北英太郎	290
航空写真によるパルプ生産地帯の調査に関する報告	中野真人	292
病害樹の被害解折	吉田光男	〃
アテの交雑育種について	倉田　信	293
第12回林業技術コンテスト参加者発表要旨		295
採穂園の土壌管理	百瀬行男	296
随　筆・随　想		
新春随想	梅田三樹男	286
	伊藤清三	〃
	川床典輝	〃
	百瀬凱二	〃
	松永泰三	〃
	高柳正幸	〃
	小林庸秀	〃
	田村栄三	〃
	茂成　章	〃
	井上　裕	〃
	高橋正夫	〃
択伐林施業の反省（上）	津村昌一	288

題　　名	執　筆　者	号
択伐林施業の反省（下）	津村昌一	289
今は昔海洋筏の話　Ⅰ	小林猛臣	293
〃　Ⅱ	〃	294
〃　Ⅲ	〃	296
――林野の鳥シリーズ――		
釧路原野の粗林にあそぶタンチョウ	宇田川竜男	287
ノウサギの天敵クマタカ	〃	288
マツクイムシとコウノトリ	〃	290
初夏の林に歌うツグミ類	〃	291
水恋鳥	〃	292
渓流のカワガラス	〃	293
モズの早にえ	〃	294
野ネズミの天敵フクロウ	〃	295
キジとヤマドリ	〃	296
山にすむスズメ	〃	297
次代の林業によせて	田中紀夫・水野金一郎 岩野三門・矢沢頼忠 小滝武夫	286
自由論壇		
省力林業と天然更新	小沢今朝芳	287
九州横断道路に感あり	中村貞一	〃
林業技術コンテスト雑感	松下規矩	288
新しい木場作林業	盛田達三	292
アカシヤ林の風害雑感	白井純郎	〃
再検討を要する施業方針	中村賢太郎	294
こだま		
予算劇とゴキブリ退治	山領子	287
プレハブ住宅展をみて	K・K生	288
茶飲みばなし	蛾々	289
経営的な感覚	ぶんちょう	290
無題	こうしょう生	291
〃	ゲテモノ	292
〝腕木〟と〝腕金〟	あまだれ	293
森林の新しい価値	M・N	294
無題	民有林生	295
プロ精神	影法師	296
無題	K K生	297
本の紹介		
ソ連邦の林業と木材工業		287
林業作業測定の進め方		288
「各論林業診断」		289

題　　名	執　筆　者	号
「クジラを捕る」		289
原色日本の林相		290
現代林業の検討		〃
資本主義的林業経営の成立過程　――吉野林業の展開と現状――		291
写真解説ワイヤーロープの継ぎ方		292
実践林業大学　Ⅱ（実践造林）		〃
タケノコ（増収のための新技術）		293
マツタケ（研究と増産）		294
早成樹の養苗と造林の実際		295
伐木運材の経営と技術		297
きじゅつ情報		
昭和39年度出願された林業関係実用新案		289
「低質材利用の現状と未利用残材活用の方向」に関する調査報告書		〃
昭和38年度林業試験報告		290
林木の成長促進　――スギ成長促進試験地――		〃
永年作物害虫の生物的防除に関する研究 ――農林水産会議事務局・研究成果――		291
永年作物土壌病害の環境的防除に関する研究（成果報告）		〃
チームワーク　川喜田二郎著		292
製材業（フローリングおよび木材チップを含む）実態調査報告書		〃
「実用技術開発試験（クリ新品種特性検定試験，モモノゴマダラメイガの産卵消長調査ならびに薬剤防除試験）昭和40年度報告書」		〃
昭和41年度都道府県別除草剤使用基準		293
昭和40年植伐面積と苗木生産量等		〃
昭和40年度畑作関係除草剤委託試験成績集録		〃
農林水産航空事業新分野開発ならびに航空機利用技術の改善に関する試験成績		294
火山灰土壌（アンド土壌）の粘土鉱物組成に関する研究		〃
カラマツ林の群落学的研究		〃
新しい技術		295
昭和41年度実施予定農林水産統計調査一覧表		〃
林業経済関係調査報告及び資料目録		296
自然休養地としての森林の保全開発に関する勧告		〃
トウホクノウサギの生態に関する研究		〃
農薬の野生鳥獣に及ぼす影響について		297
浸透性殺虫剤に関する特集記事		〃
草地開発についての日本政府への報告書		〃

第14回林業写真コンクール作品募集

主　催　　日本林業技術協会・全国林業改良普及協会
後　援　　農　　林　　省・林　　野　　庁（申請中）

1. 主　　題
写真を通じて林業の発展ならびに普及に寄与するもの。

2　題　　材
森林の生態・動植物。林業における育苗・造林・保育・伐採・搬出・製材・製炭・木材工業・特殊林産・林道被害・山村の生活・風俗など。

3. 区　　分
第１部　一枚写真　黒白写真，四ツ切
第２部　組 写 真　黒白写真，キャビネ全紙，１組15枚以内。
第３部　スライド　黒白またはカラー，35ミリ版，１組15～50コマ程度にまとめたもの。説明台本添付，テープ付も可。

4. 応 募 規 定
応募資格　応募作品は自作に限る。応募者は職業写真家でないこと。応募作品は未発表のもの。
応募点数　制限しない。
記載事項　(1)部門別(2)題名(3)撮影者（住所・氏名・年齢・職業）(4)内容説明(5)撮影場所(6)撮影年月日(7)撮影データなど。
締　　切　昭和42年２月末日（当日消印のものを含む）
送 付 先　東京都千代田区六番町七　日本林業技術協会　第14回林業写真コンクール係。
作品の帰属　第１部・第２部の応募作品は返却しない。その印画の使用は主催者の自由とする。入選作品の版権は主催者に属するものとし，必要に応じて，ネガの提出を求めることがある。
第３部作品は審査後返却する。主催者はこれを一般公開用スライドの原作として採用することがある。採用条件については応募者と協議の上決める。

5. 審査員（順不同・敬称略）
写真家　島田謹介　　農林コンサルタントセンター社長　八原昌元　　林野庁林政課長　福田貞三　　林野庁研究普及課長　大矢　寿　　日本写真家協会会員　八木下　弘　　全国林業改良普及協会専務理事　原　忠平
日本林業技術協会専務理事　徳本孝彦

6. 入選者の決定と発表
審査は昭和42年３月中旬に行なう。発表は日本林業技術協会発行の「林業技術」，全国林業改良普及協会発行の「林業新知識」または「現代林業」誌上。作品の公開は随時同誌上で行ない，適当な機会に展覧会を開く。

7. 賞

第１部	特選	１名	農林大臣賞	賞金	10,000円
	１席	３名	林野庁長官賞	賞金	5,000円
	２席	５名	日本林業技術協会賞	賞金	3,000円
	３席	10名		賞金	2,000円
	佳作	20名		記念品	
第２部	特選	１名	農林大臣賞	賞金	20,000円
	１席	１名	林野庁長官賞	賞金	10,000円
	２席	１名	全国林業改良普及協会賞	賞金	5,000円
	３席	５名		賞金	3,000円
第３部	特選	１名	農林大臣賞	賞金	30,000円
	１席	１名	林野庁長官賞	賞金	15,000円
	２席	１名	全国林業改良普及協会賞	賞金	10,000円
	３席	５名		賞金	5,000円

〔注〕各部門とも入選者には副賞を贈呈する。同一者が同一部門で２点以上入選した場合，席位はつけるが，賞金・賞品は高位の１点のみに贈呈する。

無動力で半永久的！

好評発売中

（特許無動力揚水機）

「三井ダイナポンプ」は動力不要で、しかも半永久的に揚水できる全く経済的なポンプです。
「三井ダイナポンプ」は水源より落差で導水してきますと、落差の30倍まで揚水出来ます。例えば５ｍの落差でもって150ｍまで揚水が可能で、その際の揚水量は導水量の落差／揚水高の比率となります。
「三井ダイナポンプ」は揚水量が１日３屯～1000屯まで各種用意してございます。お引合いの節は必要揚水高、必要揚水量をおしらせ下さい。

特　長　電気・油・燃料等一切不要のため全く経済的です。
（ポンプ代は１年で償却できます）
動力で揚水困難な高所にも容易に揚水できます。

用　途　上水道、水田、畑地の灌漑水、果樹園、茶園等の高地に於ける消毒水、温室ハウス内の灌水、ワサビ栽培用水、放牧場に於ける牛、馬、羊等の飲料水、牧草地の灌水、山林用苗圃の灌水、養魚池の給水、その他観光施設、気象観測所等への給水。

誌名記入説明書
ご請求下さい

三井農林株式会社

本社　東京都中央区日本橋室町2-1-1(三井ビル)　電話　東京(241)3111代表

○デンドロメーター（日林協測樹器）

価　格　22,500 円（〒込）

形　式

高　サ　125mm　　重　量　270g
幅　45mm
長　サ　106mm

概　要

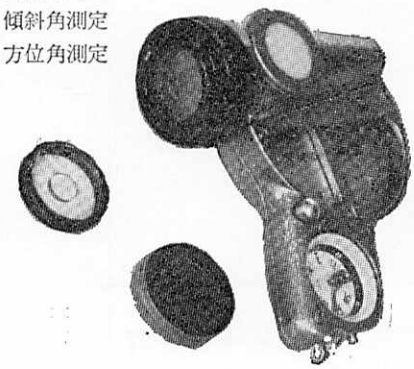
この測樹器は従来の林分胸高断面積測定方法の区画測量，毎木調査を必要とせず，ただ単に林分内の数ケ所で，その周囲 360° の立木をながめ，本器の特徴である プリズム にはまった立木を数え，その平均値に断面積定数を掛けるだけで，その林分の１ha 当りの胸高断面積合計が計算されます。

機　能

プリズムをのぞくだけで林分胸高断面積測定，水平距離測定，樹高測定，傾斜角測定が簡単にできます。
磁石で方位角の測定もできます。
プリズムの種類
K＝4 壮令林以上の人工林，天然林，水平距離測定，樹高測定
K＝2 幼令林，薪炭林，樹高測定
(水平距離設定用標板付)

用　途

Ⅰ．ha 当りの林分胸高断面積測定
Ⅱ．水平距離測定
Ⅲ．樹高測定
Ⅳ．傾斜角測定
Ⅴ．方位角測定



社団法人　**日本林業技術協会**
（振替・東京 60448 番）
東京都千代田区六番町７
電話（261局）５２８１(代表)～５

軽量チエンソーの世界的先駆者

超軽量小型ですが大型機なみの強馬力ですばらしい能率をあげます。長時間の連続作業にも全く疲れず、婦人子供でも楽に使えます。
軽くて、安くて、強力——！
三拍子揃った
スーパーチエンソーです。
（全機種チエンソー保険つき）

HOMELITE
ホームライトチェンソー
スーパーXL—12オートマチック

米国ホームライト社日本総代理店
和光貿易株式会社
本　社：東京都品川区北品川6の351
電　話（447）1411（代表）
営業所：札　幌・岩　手・大　分

THE SUN AND GRASS GREEN EVERYWHERE
太陽と緑の国づくり
盛土に…人工芝
ドハタイ

植生のコンサルタント 日本植生株式会社

営業品目
植生盤工　飛砂防止
植生帯工　インスタント芝
ハリシバタイエ　造園緑化

本社　岡山県津山市高尾590の1　TEL（08682）7251～3
営業所東京　千代田区神田佐久間町3の33（三井田ビル）　TEL（851）5537
大阪　大阪市北区末広町19番地新扇町ビル　TEL大阪（341）0147
秋田　秋田市中通3—4—40　TEL秋田（2）7823
福岡　福岡市大名一丁目一番3号石井ビル　TEL福岡（77）0375
岡山　岡山市磨屋町9—1860 1（岡山農業会館）　TEL岡山（23）1820
札幌　札幌市北四条西五丁目一イビル　TEL札幌（24）5358～9
名古屋　名古屋市瑞穂区柳ケ枝町1丁目44　TEL名古屋（871）2871
代理店　全国有名建材店

昭和四十一年十二月十日発行
昭和二十六年九月四日第三種郵便物認可
（毎月一回十日発行）
林業技術　第二九七号
定価八十円　送料六円